

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第7次調査概報

円念寺山遺跡

2002年3月

上市町教育委員会

富山県上市町

黒川上山古墓群発掘調査第7次調査概報

円念寺山遺跡

2002年3月

上市町教育委員会



1



2

1. 遺跡遠景(背後に剱岳を望む) 2. 遺跡全景



1



2



3



4



5



6

1. 金銅製独鈇杵 2. 銅磬 3. 青白磁小壺 4. 青白磁小杯 5. 青白磁合子 6. 青白磁穆花皿



1



2



3

1. 出土経筒外容器 2. 3号経塚出土経筒外容器 3. 同底面の銘

序

上市町では、平成6年に下水道管理用道路敷設に伴う発掘調査で、12世紀末から14世紀までの小山古墳群を調査しました。この遺跡は黒川上山古墓群であり、完全な形で今に残る全国でも稀な遺跡であることが判明しました。町ではその重要性から道路の方線変更を行い、全面的に遺跡を保存し、同年12月には上市町指定史跡として後世に残すことにいたしました。

上市町教育委員会ではこの遺跡を次代に残すため保存整備をする予定であります。その資料作成のための発掘調査を平成8年度より国庫補助を得て計画的に行っております。

前回までの調査で、黒川上山古墓群からは12世紀後半から15世紀に及ぶ墳丘墓67基が、黒川上山古墓群の東側には古墓群よりやや古いと思われる6基の墳丘墓、石垣造構、平坦面、石列、礎石跡が確認されました。また、伝承、真興寺跡の比定地からは、本堂跡、塔跡、堂跡と思われる基壇、礎石などの他、池跡と思われる窪み、湧水地、盛土、大きな窪みのある平坦面が確認されました。日枝神社裏さらに分布調査では、周辺の山林に大小様々な平坦面が確認されました。

今回の調査では、昨年試掘した円念寺山遺跡の詳細調査を実施し、全国屈指の経塚群が確認されました。のことから、付近一帯が黒川上山古墓群・黒川塚跡東遺跡・真興寺跡を含めた一大遺跡であったことがさらに明確になったばかりか、姫岳・立山を中心とする立山信仰にも関連する遺跡群の可能性が示されました。

調査は、平成13年6月から平成14年3月にかけて実施しましたが、この間に掘り出された資料が上市町及び富山県の歴史を物語るよですがとなれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご指導をいただきました文化庁記念物課、富山県文化財課、富山県埋蔵文化財センター、富山考古学会、黒川地区のみなさま、京都国立博物館学芸課工芸室長 久保智康氏、国際日本文化研究センター教授 宇野隆夫氏に心より感謝申し上げます。

平成14年3月

上市町教育委員会

例　　言

1. 本書は富山県中新川郡上市町黒川地内に所在する円念寺山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成13年7月16日から平成14年12月28日まで延べ60日間で実施した。分布調査は富山大学人文学部考古学研究室の協力を得て、平成13年5月12日から5月20日までの4日間で行った。
3. 調査面積は1,100m²である。
4. 調査は、国庫補助金、県補助金を得て上市町教育委員会が実施した。
5. 調査事務局は上市町教育委員会にあり、調査期間中、文化庁記念物課、富山県教育委員会（文化財課・県埋蔵文化財センター）の指導を受けた。事務及び調査担当は、生涯学習課文化振興係係長高慶孝・同嘱託三浦知徳が担当し、生涯学習課兵牧野茂雄が統括した。
6. 遺物の整理、本書の編集・執筆は調査担当が行ったが、遺物の実測・トレースは調査担当が中心となり、後述する整理作業員が行った。
7. 調査期間中、文化庁文化財調査官坂井秀弥、京都国立博物館学芸課工芸室長久保智康、国際日本文化研究センター教授宇野隆大、京田良志、久保尚文、富山県教育委員会文化財課主任安念幹倫、同池田典子、各氏の視察を受け、ご指導をいただいた。特に久保智康氏には、出土金属製品の内容について詳細なご指導をいただいた。また、分布調査において、富山県埋蔵文化財センター調査課係長橋本正春氏、氷見市教育委員会生涯学習課文化財係学芸員廣瀬直樹氏に参加協力をいただいた。

その他調査期間中及び本書の作成にあたり、下記の方々から有意義なご指導・助言並びにご協力を頂いた。記して深甚なる謝意としたい。

東京国立博物館学芸部考古課歴史室長時枝務、国立歴史民俗博物館考古研究部助手村木二郎、立山町教育委員会社会教育課主任田中幸生、黒川区長伊藤勝保、神谷育雄（順不同・敬称略）

8. 調査参加者は次のとおりである。

発掘調査参加者：井出靖夫、的場茂晃（以上富山大学大学院生）松澤那々子（富山大学学生）酒井啓子（花園大学学生）川上藍（同志社女子大学学生）荒木智恵子、伊藤萩子、岩城秀子、大沢邦子、大沢恵恵、鹿熊和雄、金子みづゑ、川上寛美子、酒井栄子、佐近ナミキ、澤井新三、其内みき子、高城英子、高城富美子、高城準子、中川セツ、西川文一、早崎秋子、松本純一

分布調査参加者：的場茂晃、山口歐志（以上富山大学大学院生）猪狩俊哉、瓜生日奈子、田中洋一、松澤那々子、山下研、岡田幸、北川康介、佐藤繪理奈、高田博文、田中俊輔、丹羽直美、林昭男、福沢佳典、宮川志保、向嶋裕、吉村晶、小川卓哉、坂野井絵里、関根奈義、竹谷充生、西本智子、阪英子、福崎祐介、細田隆博、本田晃久、前田尚美、松森智彦、間野達（以上富山大学学生）

整理作業員：砂田善司（富山大学大学院生）猪狩俊哉、松澤那々子（以上富山大学学生）其内みき子

9. 平成14年10月14日、地元黒川地区、穴の谷弘真会、上市町観光協会、上市町の4者からなる実行委員会主催で「黒川フェスティバル」を開催した。その際、黒川上山古墓群など周辺遺跡の説明会と「黒川遺宝展」と題した主要遺物の一般公開を行った。参加者は、983人であった。

目 次

序

例 言

I 遺跡の環境	1
第1図 地形と周辺の遺跡	2
II 調査に至る経過	3
III 調査の経過と層序	3
第2図 遺跡周辺図	4
IV 調査結果	5
1. 遺構	5
2. 遺物	9
黒川・護摩堂周辺の分布調査について	17
V まとめ	18
第1表 円念寺山遺跡遺構一覧表	19
引用・参考文献	21

第3図 遺構全体図

第21図 16-1号経塚実測図

第4図 1-1号石壘・壇状集石実測図

第22図 16-2号経塚、土師質皿・炭化物集中域実測図

第5図 1-2号経塚実測図

第23図 16-3号経塚実測図

第6図 2-2号経塚実測図

第24図 29号塚実測図

第7図 3号経塚実測図

第25図 黒川・護摩堂地区周辺遺跡

第8図 5号経塚実測図

第26図 黒川・護摩堂地区周辺遺跡分布図

第9図 6-1号・6-2号経塚実測図

國版

第10図 7-1号経塚実測図

國版1 黒川上山古墓群 周辺航空写真

第11図 7-2号経塚実測図

國版2～國版12 遺物実測図

第12図 8-1号・8-2号経塚実測図

國版13～國版29 遺構写真

第13図 9号経塚実測図

國版30～國版40 遺物写真

第14図 10号経塚実測図

第15図 11号経塚実測図

第16図 12号経塚実測図

第17図 13-3号経塚実測図

第18図 13-1号・13-2号経塚実測図

第19図 14号経塚実測図

第20図 15号経塚実測図

I 遺跡の環境

上市町黒川円念寺山遺跡は、富山県中新川郡上市町黒川字舟ノ谷に所在する（第1図・第2図・図版1）。上市町は、富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川に沿って東南から北西にのびる町である。西は県都富山市、北は滑川市、南は立山町に接し、東側は標高2,998mの姫岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。遺跡の所在地である黒川は市街地の北東にあり、上市川の支流、郷川の右岸標高30m前後にある。西は滑川市に隣接する。

円念寺山遺跡は、黒川上山古墓群の南約300mに位置する。通称「円念寺山」と呼ばれる尾根上標高85m前後に占地する。円念寺山遺跡は、一昨年と昨年の分布調査と試掘で尾根上に数多くの遺跡が見つかり、珠洲焼と金属製品（短刀・刀子）を確認したが、今回の調査で全国屈指の大規模経塚群であることが確認された。

遺跡は、県道五位尾・上中町線に平行する尾根上でこの尾根を東に上れば、一昨年分布調査した開谷集落に至る。開谷集落は、宗教集落として発達したといわれ、源内坊・奥野坊・作内坊・好田坊などができる信仰の中心になったといわれる。遺跡のある舟ノ谷は、前述のように「円念寺山」と呼ばれ、本地域の宗教上の拠点の一つといわれる。尾根上からは、黒川集落のある谷を一望でき、北に上山古墓群、西に真興寺、東に護摩堂、さらには姫岳を一望にできる。平野部に目を転ずれば、滑川堀江方面（中世は、堀江荘と呼ばれる祇園社領の荘園）、遠く富山湾まで望める景勝の地である。

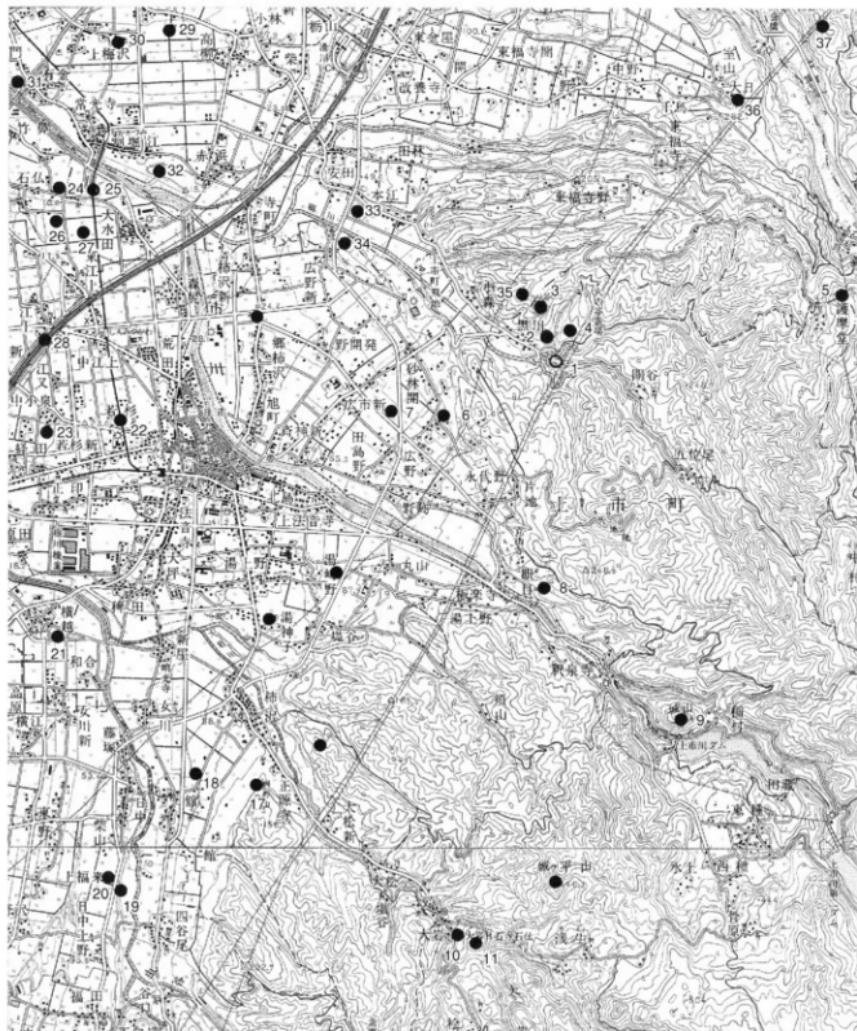
今回の調査の一環として行った分布調査・簡易測量調査は、本遺跡の東約3kmの護摩堂地区周辺を対象に行った。護摩堂地区は、黒川集落の南を東西に流れる郷川の支流、交地川の上流にあり、谷間を抜けた山地山腹に開けた平坦地にある地区である。

護摩堂の名は、今から約千年前に弘法大師空海が巡錫の折り、住民の幸せを祈って護摩をたかれた事によるともいわれている。天和元年間（1681~84）大岩山日石寺の住僧が大師の靈跡として堂宇を建立したとされる大師堂が現在でも残っている。標高は、約400mで、付近からは、富山平野と富山湾・能登半島を一望できる。

この地区では、大小の平坦面が数多く確認され、寺院跡・僧坊跡などが想定できた。また、黒川との中間地点には、巨岩・奇石が数多く確認できた。ここでは「仏岩」と呼称される大岩がありその直下で岩屋と考えられる穴を數カ所確認した。護摩堂背後の山地は標高約480mで、尾根上から姫岳をはじめとする立山連峰が一望でき、尾根続きに早乙女岳・大日岳・室堂に至る。このことから黒川・護摩堂地区一帯は、中世密教の大きな霊場であり、霊場立山の入場口の一つであった可能性が大きくなつたものと考える。

町内及び郷川・白岩川周辺の古代から中世の遺跡としては、市街地の北東に真言宗の古刹「大岩山日石寺」がある。この寺院は北陸有数の真言寺院で、開基は奈良時代まで遡るといわれる。本尊は不動明王で磨崖佛として国指定文化財として指定されている。また裏山の京ヶ峰には12世紀後半の經塚があり、經筒及び外容器が出土している。

大岩からは、浅生を経て、高峰山・大辻山・早乙女岳・大日岳・室堂というルートがあり立山信仰との強い結びつきが想定できる。これら中世宗教遺跡のバックボーンをなすのが、文献上古代から中世に登場する堀江保・小森保あるいは堀江荘に関連するとみられる遺跡（江上B遺跡・東江上遺跡・上梅沢町遺跡・本江馬場田遺跡・横越遺跡など）、南北朝期から戦国時代まで中新川一帯に勢力のあった土肥氏をはじめとする豪族の城や居館跡（護摩堂城跡・稻村城跡・郷代沢館跡・赤沢城跡・茗荷谷山城跡・郷田砦・弓庄城跡・千石山城跡・有金城跡・堀江城跡・堀の内城跡など）であり、これらの遺跡との関わりの中でその消長があったものと考えたい。このことから、平野部の遺跡との関連・山間部の城や寺院との関連も十分視野に入れると共に、密教における山岳信仰のあり方を十分に考慮に入れた調査が必要であり、中新川地区全体の中世の遺跡の詳細な検討が必要である。



第1図 地形と周辺の遺跡(1/50,000)

- 1.円念寺山遺跡
- 2.日枝神社裏遺跡
- 3.真興寺跡遺跡
- 4.黒川上山古墓群
- 5.蓑輪城跡
- 6.広野C遺跡
- 7.広野D遺跡
- 8.眼目山旧開山堂遺跡
- 9.福村山城跡
- 10.日石寺層崖仏
- 11.大岩京ヶ峰経塚
- 12.郷柿沢館跡
- 13.湯崎野西遺跡
- 14.湯神子B遺跡
- 15.柿沢城跡
- 16.落荷谷山城跡
- 17.郷田砦
- 18.弓庄城跡
- 19.日中玉橋経塚
- 20.日中東経塚
- 21.横越遺跡
- 22.若杉神田遺跡
- 23.中小泉東遺跡
- 24.石仏道跡
- 25.石仏岡町遺跡
- 26.石仏南遺跡
- 27.大永田西遺跡
- 28.江上B遺跡
- 29.上梅沢町遺跡
- 30.上梅沢遺跡
- 31.有金城跡
- 32.堀江城跡
- 33.本江馬場田道跡
- 34.金助山砦跡
- 35.小森館跡
- 36.堀の内城跡
- 37.木尾南城跡

Ⅱ 調査に至る経過

上市町黒川地区内では、平成5年度に農業集落排水事業の管理用道路が計画され、当該地区に所在する上山古墓群の、事前発掘調査が行われた。調査の結果、本遺跡が全国でも少ないと想定される墳丘墓で、墓数も40基を上回るきわめて良好な遺跡であることが明らかとなった。上市町教育委員会は、上級機関の指導のもと、県文化財保護審議委員瀧澤辰氏・奈良大学学長水野正好氏に現地視察をお願いし、保存に関する意見をいただいた。この意見を元に、町当局と再度協議、地区元黒川地区からの保存要請もあり、全面保存で合意した。その後同地区内は平成6年12月8日町指定史跡として指定され、平成7年度には公有地化も図られた。平成8年度から国庫補助金・県費補助金を得て黒川上山古墓群の保存と一般公開のための資料収集を目的とする周辺調査を行っている。

Ⅲ 調査の経過と層序

第1次調査(平成6年度本調査) 調査期間：平成6年5月13日から同年7月27日(延べ72日間)。調査対象：1,500m²。遺構：墳丘墓19基など。遺物：珠洲藏骨器・土師質土器(かわらけ)など。年代：遺構と共に伴する藏骨器・土師質土器から13世紀代の墓群で、造営時期もほぼその年代に比定された。その他：調査地区以外の部分においても16基以上の墳丘が観認され、全体で39基以上の墳墓が存在していることが明らかとなった。

平成6年度試掘調査 調査期間：平成6年9月9日から9月22日(延べ11日間)。対象対象：古墓群東側の山林約5,000m²。道路方線の変更に伴う事前の試掘調査。その他：県補助金を受けて実施した。

第2次調査(平成8年度本調査) 調査期間：平成8年11月7日から同年12月17日(延べ25日間)。調査対象：約1,500m²。遺構：墳丘・集石・五輪塔など45カ所の埋葬施設。遺物：珠洲藏骨器・輸入磁器・土師質皿・五輪塔6カ所。その他：1次調査を含め全体で70カ所の埋葬施設を持つ墓群であることが明らかとなった。

第3次調査(平成9年度本調査) 調査期間：平成9年8月21日から同年10月7日(延べ32日間)。調査対象：古墓群東側平坦面、約5,500m²。遺構：墳丘墓6基・平坦面10、掘立柱建物1、石列1、礎石跡5・石垣遺構1カ所、参道ないし墓道1カ所。遺物：8世紀から12世紀までの須恵器片多数、繩紋土器・硬玉製品など。

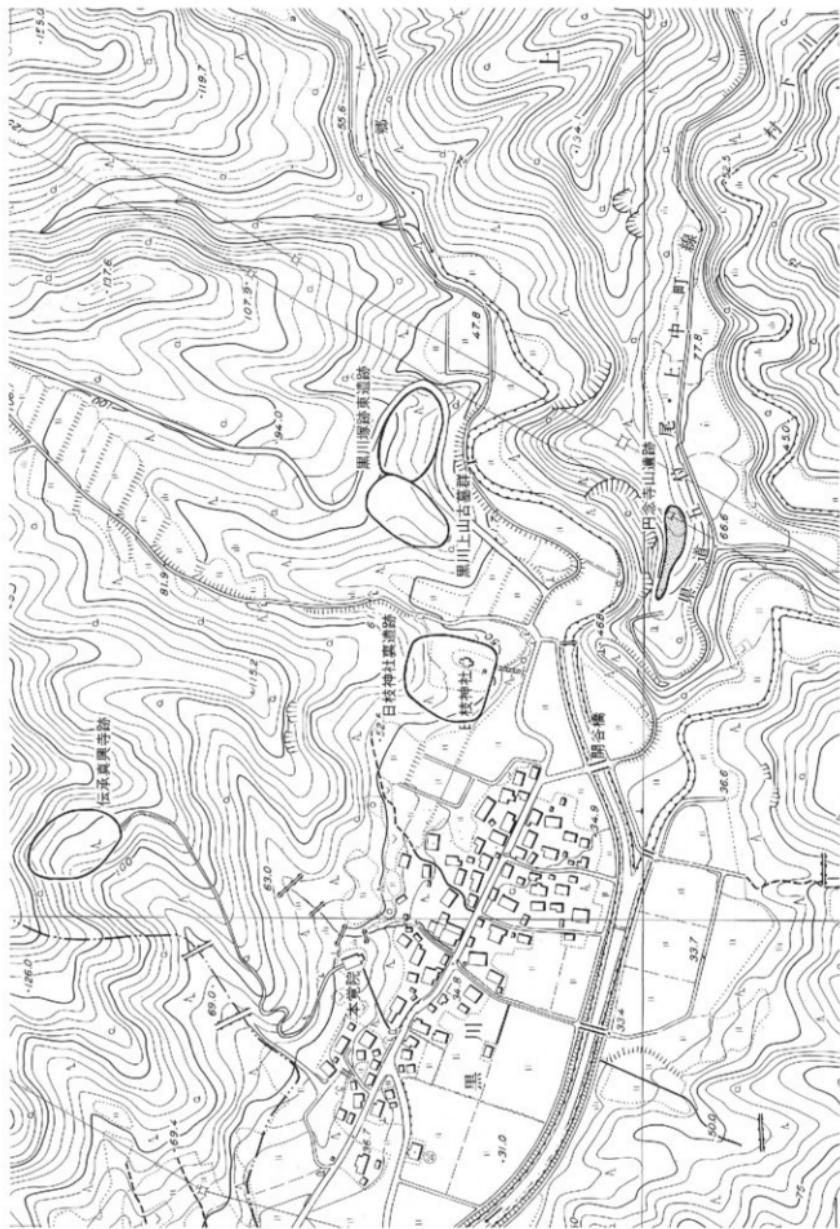
第4次調査(平成10年度本調査) 調査期間：平成10年10月8日から同年12月28日(延べ33日間)。調査対象：旧真興寺跡と伝承のある平坦面約3,200m²。遺構：本堂跡・塔跡・堂跡などの基壇・礎石・盛土状遺構・池・石敷・山門の石段と石垣・湧水地・横穴・など。遺物：土師質皿・須恵器・珠洲・越中瀬戸・唐津など。年代：9世紀から18世紀。その他：黒川地区山中の分布調査を行い、大小様々な平坦面を確認した。

第5次調査(平成11年度本調査) 調査期間：平成11年9月27日から平成12年3月31日(延べ89日間)。調査対象：真興寺跡の再調査、本堂及びその周辺調査。その他：周辺と開谷地区の分布調査及び簡易測量を実施した。

第6次調査(平成12年度本調査) 調査期間：平成12年6月12日から平成13年3月31日(延べ56日間)。調査対象：日枝神社裏の平坦面及び字名、舟ノ谷(円念寺山と呼ばれる)の試掘調査2,500m²。その他：穴の谷壹場周辺の分布調査・簡易測量を実施。

第7次調査(平成13年度本調査) 調査期間：平成13年6月12日から平成14年3月31日(延べ60日間)。調査対象：黒川字舟ノ谷約1,100m²。遺構：石櫛1・壇状集石1・經塚23カ所・集石：14カ所。遺物：珠洲(経筒外容器)・青白磁・鉄鉗・簪・短刀など金属製品。その他：渡摩堂周辺地区分布調査及び簡易測量実施。

層序 遺構は、表面の落葉・雑草・腐植土(5~10cm)を排除することによって検出される。平坦面には後世に畠として利用された部分もあり、その際に集石が移動した可能性もある。



第2図 遺跡周辺図(1/50,000)

IV 調査結果

1. 遺構（第3図～第24図、図版14～図版27、第1表）

今年度の調査は、昨年度に検出した集石群のうち西半部のものを対象に、その性格を明らかにすることを目的に実施した。集石の石材を随時記録を取りながら取り外した結果、その地下より板状の石材を組み合わせた箱状あるいは礫積みの石櫛を計24基検出した（ただしうち1基は当初より地表に露出）。これらは尾根上には一直線に連なり、上部を覆う集石の重なりから概ね尾根の先端から顔に築造されていったことが窺える。築造当初はその上部にも積石や盛土などが施されていたものであろうが、大部分は既に失われていた。石櫛の大半は調査以前に開封された痕跡をもつものの、埋納主体部が完存していた6基をはじめ埋納品をとどめるものも多く、出土遺物の性格やほぼ同時期に營まれ始めた黒川上山古墓群の遺構構造との相違から、これらは12世紀後半（平安時代末期）に造営された経塚群であったものと判断した。ここでは、経塚遺構を中心にその構造について概略を述べる。ただし遺構番号が必ずしも築造上の単位になっているわけではないことを明記しておく。

なお、石櫛内の埋土は特に旨及しない限り3～5cm人の裸をまばらに含む黄褐色～黄灰色土である。

1-1号石櫛・壇状集石（第4図、図版14） 遺跡の西端、尾根の先端部に位置し、長方形の集石とその南西隅に取り付く石櫛（昨年度報告の石櫛1）からなる。両者は石櫛→集石の順で築かれている。石櫛は調査以前から地表面に露出しており、内部は5cm大の礫が混じる黄褐色土で埋まっていた。平坦な1枚の底石と4枚の側石からなり、内法は長軸30cm、短軸25cm、高さ40cm（以下「×」で表示）ほどである。埋土を取り除いたところ、底石上から金銅製独鉢件（図版2-1）と銅磬（図版2-2）が出土した。金銅製独鉢件は鉢の両端をほぼ南北に向けて置かれ、そのまま東側に銅磬が裏面を上にして置かれていた。ともに右櫛の東側に偏っていて西側には空間があるが、経筒外容器を納める空間的余裕や経筒の痕跡はなく、本石櫛が尾根最先端に位置すること、これのみが地上に露出することという特異性なども考え合わせると、これは「経塚」ではなかった可能性が高い。本経塚群造営に際する造営主の強い意志、あるいは地鎮・結界などといった何らかの儀礼的な背景があったものと考える。

壇状集石は50cmの大ぶりの石材を小口を意識するように配したもので、北辺・西辺は2段に積み、上面は概ね平坦である。長軸約200cm、短軸約100cm、高さ約40cmを認める。集石中、試掘標のいずれからも遺物は出土していない。上述の石櫛に伴う祭壇的なもの可能性がある。

1-2号経塚（第5図、図版15） 1-1号壇状集石の南東部に接して築造された経塚。区画は1-1号壇状集石との境が不明瞭なもの、180×150cmほどの方形を意識して30～50cm大の石を配しているようである。石櫛は1枚の底石・5枚の側石・1枚の蓋石によって60×30×45cmほどの空間を作り出しており、内部からは珠洲四耳壺（図版2-3）、珠洲片口鉢（図版2-4）がともに北東方向に向かって倒れた状態で出土した。埋納時は四耳壺に片口鉢で蓋をしていたものであろう。四耳壺の内部は石櫛内埋土と同様の土で埋まり、それ以外には何も遺存していなかった。また、南東側の側石の外側にはもう1枚の板状の立石が存在し、さらにその外側から短刀1口（図版2-5）が切先を下にして立った状態で出土した。

2-2号経塚（第6図、図版15） 1-2号経塚の東に隣接する経塚。区画は東側の縁石が不明瞭ながらも150×120cmほどの方形を呈する。石櫛は平坦な底石の四方に側石を立てた立方体状で、内法は25×20×30cmほどである。本経塚は集石検出時より区画のほぼ中央に石櫛の蓋石が露出しており、蓋石を取り除いたところで石櫛内から珠洲経筒外容器（図版3-1）、北側と東側の側石の間から短刀1口（図版3-2）が切先を下に向けて差し込まれた状態で出土した。経筒外容器内は上端から10cmほどまでは小礫混じりの褐色土、それ以下は小礫混じりの灰色土で埋まり、礫以外の内容物は遺存していなかった。

3号経塚（第7図、図版16・17） 2-2号経塚の東に隣接する経塚。南側は崖に接し、また上部の集石がほとんど失われていたため区画は不明であるが、石櫛北側に並ぶ30cm大の石が区画縁石であった可能性がある。その場合、約180cm四方の方形区画が想定できる。石櫛は1枚の底石・6枚の側石で構成され、南北に長い楕円形を呈する。内法は60×45×45cmほどで、そのほか中央に珠洲経筒外容器（図版3-3）、その周囲を充填する10~15cm大の結石中に青白磁合子（図版4-1）、青白磁小壺（図版4-2）、火打金（図版4-3）が配される。また、411の短刀（図版4-4~7）がそれぞれ位置を違えて出土したが、うち3口はいずれも先を下に向けて立つという点で共通する。経筒外容器の内部は上部10cmほどまでは小礫混じりの褐色土、それ以下は小礫混じりの灰色土で埋まり、礫以外の内容物は遺存していなかった。なお、蓋石と思しき大型の石材は付近には見当たらないが、結石と同様な礫によって経筒外容器上を被覆しているような状況が窺われ、その礫中からは経筒外容器蓋の火焔部破片が出土している。

5号経塚（第8図、図版18） 3号経塚から4mほど東に位置する経塚。区画は樹根による擾乱によって不明瞭であるが、現状では150×100cmほどの方形を呈する。上部集石中より珠洲経筒外容器蓋片（図版9-12）が出土しており、過去に開封及び埋納品の抜き取りが行なわれたことを示唆している。石櫛も樹根による破損が著しいが、1枚の平坦な底石と4枚の側石を確認した。内法は45×35×30cmほどである。石櫛内部から遺物は出土しなかったが、石櫛の北側からは3口の短刀（図版9-1-3）が出土した。これらは埋納当時の状況を保っているものと推測される。

6-1号・6-2号経塚（第9図、図版18） 5号経塚の東に隣接する。尾根を分断するような幅120cm、深さ60cmほどの溝を埋めるように集石が施されており、その地下から南北に並ぶ2基の石櫛を検出した。溝の底に石櫛を2基構築し、集石によって溝を埋めたものと推測される。南側の石櫛を6-1号経塚、北側の石櫛を6-2号経塚とした。6-1号石櫛は1枚の底石と5枚の側石からなり、平面形は五角形を呈する。内法は35×30×40cmほどを測る。6-2号石櫛は5枚の側石のみで構成され、内法30×25×30cmほどの空間を作り出している。石櫛・集石のいずれからも遺物は出土しなかった。

7-1号経塚（第10図、図版19） 6-1号・6-2号経塚の東に隣接する。北側と西側には50~60cmの大ぶりな区画縁石が並び、約180cm四方の方形区画が想定できる。区画中央部は集石が希薄で過去の開封があったことを窺わせていたが、その地下から1枚の底石と7枚の側石からなる内法70×50×40cmほどの石櫛を検出した。石櫛内部は本来蓋石や上部集石であったものと推測される石で埋まり、そこから経筒外容器蓋として用いられたものであろう珠洲片口鉢（図版12-1）が破片で出土した。また、石櫛北東部の側石裏側より短刀1口（図版9-4）が刃部を下にして横向きで出土した。

7-2号経塚（第11図、図版19） 7-1号経塚の東に隣接する経塚。30~50cm大の区画縁石とみられる石から推定すると、210×180cmほどの方形区画であったようである。区画西辺の縁石は隣接する7-1号経塚と共有する。検出時から区画の中央部付近が1段低く、その部分の集石を取り除いたところ珠洲片口鉢（図版4-9）が伏せた状態で出土し、その下部より珠洲四耳壺（図版4-8）と石櫛を検出した。石櫛本体は1枚の底石と5枚の側石で構成されるが、北側以外の三方は外側にさらにもう1枚ずつ側石状の石が存在し、二重構造になっている。内法は50×50×40cmほどで、四耳壺が石櫛のほぼ中央に据えられ、その間に20cm大の礫が詰まる。四耳壺内は石櫛内埋土と同様の上で埋まり、礫以外の内容物は遺存していなかった。

8-1号・8-2号経塚（第12図、図版20） 8-1号・8-2号経塚は、築造工程上互いに密接な関係にあるものと想定される経塚である。区画北辺・南辺に30~40cm大の区画縁石が約180cm離れてほぼ平行に約240cmにわたって並び、その間に2基の箱型の石櫛が築かれている。両者を区画する明確な縁石は認められず、石櫛間は心心距離で約120cmを測る。西側の8-1号経塚の石櫛は1枚の平坦な側石と5枚の側石で構成され、内法は30×25×40cmほどである。石櫛内には本来蓋石であったものと考えられる板状の石が段に落ち込む。西側の側石の外側からは昨年度の調査で短

刀（図版9～5）が斜めに差し入れられた状態で出土している。石柳北側の集石中からは青白磁小杯（図版8～5）が出土しているが、元位置を保っていたものかどうかは不明である。東側の8～2号経塚の石柳は昨年度の報告で石柳2としたものである。1枚の平坦な底石と5枚の側石で構成され、内法は30×30×40cmほどである。両者はその位置関係のみならず大きさや構造なども類似しており、一連のものとして構築された可能性が高い。なお、北側・南側の区画線石のあり方からは、次に述べる9号経塚も一連のものとして整かれた可能性も想定できる。

9号経塚（第13図、図版21） 前述の8～1号・8～2号経塚の東に隣接する経塚である。南北220cm、東西120cmほどの長方形区画を意識した集石がなされる。区画中央部付近は積石状に集石が施され、それを取り除いたところ7口の短刀（図版5～3～6、図版6～1～3）が出土し、その下には蓋石の上面がぞいていた。これらは互いに一部重なり合いながら三角形、あるいはU字状を意識して蓋石上に配置されたものであろう。また、蓋石東端付近からは2点の棒状鉄製品（図版6～4～5）が出土している。短刀類と蓋石を取り除くと、半割された珠洲片口鉢（図版5～2）を蓋とする珠洲四耳壺（図版5～1）が石柳内から出土した。石柳は1枚の底石と5枚の側石からなるが、側石上には持ち送り石状の石が積まれてそこに蓋石が乗る。その内法は35×35×30cmほどで、四耳壺との間には10cm大の詰石が入る。四耳壺内は半分ほどまで石柳内埋土と同様の土で埋まり上半は空間が残されていたが、環以外の内容物は遺存していなかった。

10号経塚（第14図、図版22） 9号経塚の東に隣接する経塚。東隣の11号経塚の集石が一部覆い被さるため不明瞭ではあるが、南北210cm、東西120cmほどの長方形区画であったようである。区画の北側は過去に石の移動があったようで集石は希薄であるが、南側には積石状の集石が存在する。その集石を取り外したところ1枚のやや平坦な環が水平に置かれており、その下部から珠洲壺（図版6～6）が出土した。壺には片口鉢などの陶製蓋はなく、さきの平坦な環を蓋としていたようである。また、この石は石柳の蓋石としての役割も果たしていたものであろう。石柳は厚さ5～10cmほどの小ぶりな環を壺を固定・保護するように小口に積み上げたものであり、他の経塚の石柳とは構造が異なる。壺内部は石柳内埋土と同様な土で埋まるが、内部より不明鉄製品3点（図版6～8～10）を検出した。しかし銅製経筒などは出土していない。また、石柳の北より銅鏡（図版6～7）が1面、鏡面を下にして置かれた状態で出土した。

11号経塚（第15図、図版22） 10号経塚の東に一部重複して存在する経塚である。区画北側は崖面上部に連なる石垣状の石組に接するため不明瞭ではあるが、およそ200cm四方の方形集石であったようである。集石は一部樹根による搅乱を受ける。集石中より珠洲壺口縁部片（図版7～1）、片口鉢片（図版7～2）が出土しており、過去における開封を窺わせる。集石地下からは30cm大の石を長手に配した西に聞く「コ」の字状の石組を検出した。東側から南側にかけては2～3段ほど積み上げており、築造時には西側・北側にも石組が巡っていた可能性がある。現状で内法50×50×50cmほどを測り、その内部より銅鏡2面（図版7～3～4）が鏡面を合わせた状態で石組北辺から、短刀2件（図版7～5～6）が並んで立った状態で出土した。

12号経塚（第16図、図版23） 11号塚の東に位置する経塚。上部の集石はほとんど存在せず、石柳上部が露出していた。石柳は90×75×50cmほどの円形土壤の壁に側石を貼り廻らせてその上部にも石を乗せたものと推測されるが、側石は一部元位置を遊離している。遺物は出土しなかった。

13-3号経塚（第17図、図版23） 平坦面1の西辺に位置する経塚。樹根による崩壊・変形が著しい。現状からは区画は100×90cmほどの方形であったものと推測される。石柳は構築当初の姿をとどめてはいないが、1枚の側石と3枚の側石を確認した。内法は1辺が25cmほどの立方体状であったものか。石柳内外ともに遺物の出土はない。

13-1号経塚（第18図、図版24） 13-3号経塚の東に位置する経塚。200×120cmほどの長方形区画の南端に、1枚の底石と6枚の側石からなる石柳が構築されている。区画中央に存在する大型の石は元位置から動かされた蓋石で

あった可能性が高い。石櫛の内法は $45\times40\times40\text{cm}$ ほどで内部は $10\sim30\text{cm}$ 大の礫で埋まり、多くは縱向きに入る。この櫛中及び石櫛外に珠洲経筒外容器（図版9-13・14）が破片となって散乱しており、その一部は隣接する13-2号経塚の集石中に及ぶ。また、東側の側石間に短刀が切先を下に向けて差し入れられていた。

13-2号経塚（第18図、図版23） 13-1号経塚の東に隣接する経塚で、境界の区画線石を共有する。これらの経塚も築造工程上の関連を持つものと考えられる。区画は $200\times120\text{cm}$ ほどの長方形を呈し、その南寄りに埋納主体部がある。埋納主体部は土壤の北側・東側に側石状の石が存在するものの、残る2面には側石状のものは存在しない。その空間は現状で $40\times40\times30\text{cm}$ ほどを測り、内部は $10\sim50\text{cm}$ 大の礫と黄褐色土で埋まる。礫のうち大型で板状のものは石櫛の側石や蓋石が元位置を離れたもの可能性があり、ここでは一応この埋納主体部も「石櫛」として扱う。石櫛の西壁は現状では上壁となっているが、青白磁小壺（図版8-6）と青白磁殘花皿（図版8-7）がともに門縁部を壁側に向けて貼りつくようにして出土した。この2点が石櫛の内部に納められたものか、側石の裏側に納められたものかは不明である。

14号経塚（第19図、図版24） 13-2号経塚の東に隣接する経塚であり、区画は約 180cm 四方の方形を呈する。全体的に大ぶりな石で構成され、中央部付近ではそれらが積み上げられたような状態であったことから埋納主体部が良好に遺存していることが予想された。しかしこれらの石を取り除いたところ、石櫛は半分崩壊した状態で遺物も出土しなかった。過去に開封した後に再度石を積み直したものであろうが、そうした手間と労力を必要とする行動の背景については不明な点が多い。単なる「盗掘」として片付けることのできない理由があったものかも知れない。石櫛は $90\times75\times50\text{cm}$ ほどの角円形土壙の壁に側石を廻らせたものと推測されるが、現状では3枚の側石を残すのみであった。

15号経塚（第20図、図版25） 14号経塚の東に隣接する経塚。 $30\sim50\text{cm}$ 大の区画線石が 180cm 四方の方形に廻り、その中央部に石櫛を構築し、その周囲に集石が残る。西側の区画線石の一部は14号経塚の東側区画線石に乗り上げており、築造上の前後関係を示している。石櫛は1枚の底石と5枚の側石で構成され、その内法は $30\times30\times30\text{cm}$ ほどである。石櫛には蓋石状の石が乗っていたものの、その内部は 10cm 大の礫と黄褐色土で埋まり、遺物は出土しなかった。

16-1号経塚（第21図、図版25） 15号経塚の東に隣接する経塚で、境界の区画線石を共有する。区画は $180\times150\text{cm}$ ほどの方形を呈し、その東端部に $90\times90\times30\text{cm}$ ほどの円形土壙の壁に側石を貼り廻らせて構築した石櫛を有する。土壙の掘り込み面は緑石の据えられた面より約 10cm 低く、2段掘り状を呈する。側石は現状では6枚確認できるが一部崩壊しており内側に倒れ込んだ側石も存在する。石櫛内部は $20\sim30\text{cm}$ 大の石で埋まり、多くは縱向きに入る。遺物は出土しなかった。

16-2号経塚（第22図、図版25） 16-1号経塚の東に隣接する経塚で、境界の区画線石を一部共有する。 150cm 四方の方形区画のようであるが、南側の区画線石は失われている。区画中央に1枚の底石と4枚の側石からなる箱型の石櫛があり、内法は $30\times25\times35\text{cm}$ ほどを測る。石櫛構築用土壤の掘り込み面は周囲より1段低く、その差は 20cm ほどである。石櫛内から遺物は出土しなかったが、区画南辺付近より珠洲片口鉢片（図版12-3）が出土している。

土師質皿・炭化物集中域（第22図、図版25） 16-2号経塚南の平坦部において、土師質皿（図版9-8-11）及び炭化物片がまとめて分布する範囲を確認した。その最大分布範囲は東西 250cm 、南北 130cm ほどの長円形を呈し、その中央西寄りの径 50cm ほどの範囲に特に集中する。土師質皿は大部分が細片と化しており、意図的な破碎と散布を窺わせる。なお、本集中域中の東寄りの地点には、板状に破碎された礫の集積が認められる。礫の中には被熱による赤化かと思われる痕跡を残すものがあり、この場において何らかの儀式が執り行われていた可能性が高い。

16-3号経塚（第23図、図版26） 16-2号経塚の東に位置する経塚。区画は 120cm 四方の方形かと推測されるが不明瞭である。石櫛は底石をもたない箱状で、東側のみ内側を2段に積み、あとは3枚の側石が囲う。内法は $30\times30\times50\text{cm}$ ほどで、平面形に比して深い。石櫛の内部は $10\sim30\text{cm}$ 大の石で埋まる。石櫛内部とその周辺から珠洲片口鉢（図版12

— 2 —) が破片となって出土している。

17号経塚 (第23図、図版26) 16-3号経塚の東に位置する経塚。210cm四方ほどの方形に両側が想定できる。石部は北側の一部と南側が板状の立石である以外は、礫を3段ほどに積み上げる。内法は25×20×45cmを測り、平面形に比して深い。石部内部は10~20cm大の礫が詰まるが、それに混じって珠洲片口鉢の注口部破片 (図版12-9) が出土した。

29号塚 (第24図、図版26・27) 平坦面3の北東端付近に位置し、長さ10m、幅2m、高さ0.9mほどの土壘の上部に長さ6mほどの集石を施す。石部のような地下施設は持たない。北側崖際では平成11年度の分布調査において完形の珠洲壺 (図版8-3)・珠洲片口鉢 (図版8-4) が採取されている (第24図円形網点部分)。昨年度の調査においてもまとまった量の珠洲壺・片口鉢が出土していたため、今年度も継続して集石の検出を行なった。その結果、分布調査において珠洲壺・片口鉢を採集した地点より西に30cmほど離れた場所で珠洲壺 (図版8-1) とそれに蓋として覆い被さる珠洲片口鉢 (図版8-2) が土中に埋設された状態で出土した。明確な埋設用土壠は確認できない。壺の内部は明褐色土で埋まり、壺の口縁部破片と蓋となっていた片口鉢の破片が底付近に落ち込んでいた以外には何も入っておらず、焼骨も認められなかった。

集石中央部付近では、多量の珠洲壺体部破片が散布している状況を確認した。これらはその後の整理作業によって、1個体の大型の壺 (図版7-7) であることが判明した。底部は土壘上に掘えられた状態で出土しており、埋設されたものではないようである。また、土壘上面の南側肩部付近において火打金 (図版7-8) が1点出土しているが、元位置を遠離しているようである。

その他の集石 (第3図) 平坦面3の北側縁辺の崖際に連なる29号塚以外の集石については、本年度調査では集石検出作業の継続にとどまり、その性格を明らかにすることはできなかった。作業に伴って各集石より珠洲壺・片口鉢片が散発的に出土 (図版10-12) したほかは、集石25・26の南からは石硯破片 (図版12-18)、集石30付近からは鉄製刃物の破片 (図版9-7) と小製人形 (図版12-17) が出土したのみである。

平坦面3 (第3図、図版27・28) 平坦面3は集石20~集石30の南に広がる850m²ほどの平坦面である。標高は約85~86.5mを測り、南側に若干傾斜している。現在は杉の植林が行なわれているが、地表面には過去の畑作による歓状の高まりが認められる。経塚群・集石群に隣接することから堂など何らかの関連施設の存在が推定されたため、第1トレンチ~第5トレンチの試掘トレンチを設定して遺構の検出を試みたが、遺構を検出することはできなかった。また、表土中、あるいは表土直下より数点の遺物が出土したもの、それらは全て北側の集石に伴うものの流れ込みと判断し得る珠洲壺・鉢の小破片や近世以降のものであった。遺構自体が存在しなかったのか、後世の畑作・植林によって遺構面が失われたものかについては今回の調査では明らかにできなかった。

2. 遺 物 (図版2~図版12・図版30~40)

円念寺山遺跡で出土した遺物は、金銅製独鉢・銅磬・銅鏡・短刀・火打金・青白磁合子・青白磁小壺・青白磁稲花皿・珠洲経筒外容器・珠洲四耳壺・珠洲壺・珠洲片口鉢・石硯などであり、いずれも本遺跡の主体が経塚群であることを色濃く示すものである。ここでは、埋納主体部が良好に遺存していたものについては遺構毎に、その他のものについては遺物の種別毎にその概要を述べる。

1-1号石櫛出土遺物 (図版2) 図版2-1・2は1-1号石櫛出土。1は金銅製独鉢であり、密教法具のうち最も重要視される金剛杵の基本形態をなすものである。鉢の両邊にわずかな傷みが認められる以外はさしたる欠損もなく、表面には黒漆の塗膜を残す優品である。把中央部には大型で立体的な横長の鬼目が4つ廻り、その両側には3条の紐帶できつく締めたむくりのある8葉蓮弁帯と、断面方形で匙面のある鋸い鉢が取り付く。また蓮弁は素弁で鏽が立ち、蓮弁と鬼目部・鉢部との接続部には彫を表わす無数の線刻が施されている。これらの諸特徴から、本品の製

作年代は平安時代後期の範疇で捉えることが可能であろう。なお、主要な計測値は以下の通りである。

全長：18.2cm 把部長：6.3cm 鬼目長径：1.2cm 鬼目短径：0.9cm 蓮弁帯長：2.7cm（左右とも）

蓮弁帯径：紐部1.3cm／葉部1.6～1.8cm 鍔部長：左5.9cm／右6.0cm 鍔部幅（節）：左1.7cm／右1.6cm

独鉢杵をはじめとする金剛杵は、一般的には非常に長期にわたる伝世を経るという性格を有する。そのため、信仰遺跡から出土する金剛杵は埋納用に製作された模造品や非実用品が多く、法具として実際の修法に使用された実用品の出土は極めて稀である。そのような中で、本品は造作も精緻で表面には黒漆の塗膜を残すなど実用品とみてよい点が多く、またその製作年代も11世紀代にまで測りうる可能性を持っており、国内でも極めて貴重な遺例である。またこうした資料的価値のみならず、そのような品がこの地に埋納されたという事実も重要であり、本經塚群造宮にあたっての強烈な意識の存在を如実に示しているものと考えることも可能であろう。

2は銅鏡で、表面中央の撞座以外は表裏ともに文様のない素文片面簪である。簪とは仏教において勸行の際に打ち鳴らされる鳴具の1つであり、前述の独鉢杵同様、守院において長年にわたって使用される性格のものである。本品は出土時には割れていて左側の肩尖と鍔を欠失するものの、ほぼ完形で絞長（握手）は15.7cm、厚さは鉢部で0.1cm、縁部で0.3cmを測る小型・薄手の品である。撞座は中央に9個の房子を置き、無文帶と薬を表わす線刻帯とを経て外周に14葉の花弁を廻らせる菊花様を呈し、その径は4.7cm、厚さは0.2～0.3cmほどを測る。縁部は幅0.3～0.5cm、高さ0.3cmで断面形は三角形に近いがやや丸みを帯びる。

簪は一般的に撞座のみの無文簪で片面のものが古式であるとされており、本品の製作年代も他の出土遺物から推定される本經塚群の造営時期（12世紀後半）を降らなものとみて良さそうである。なお、簪が遺跡から出土するという事例は多くなく、特に經塚から出土することは稀である。しかも、今回のように同一の石室内において独鉢杵とセットで埋納されていたことが発掘調査によって確認されたのは、おそらく国内でも初の事例であろう。

1-2号經塚出土遺物（図版2） 図版2-3～5は1-2号經塚出土。3は珠洲四耳壺で、経筒外容器として用いられたものである。器高27.7cm、口径11.2cm、胴部最大径20.2cm、底径10.6cmを測り、いわゆる壺R種AII類（吉岡1994）に分類される。倒卵形の体部より上方に伸び上がる口頭部は、口縁部で緩やかに外反し端部を丸くおさめる。環状把手は幅5.4cm、高さ2.7cm前後で垂直に近く立ち上がる。内外面ともに轆轤成形の痕跡を残し、外面は柳描波状文等の装飾は施されず素文のままである。外底面には回転糸切り痕をとどめる。焼成は還元焼成で色調は概ね暗灰色を呈す。全体的に降灰による自然釉がかかり、肩部付近では剥落して器面が荒れる。珠洲焼編年I期に属するものと考えた。

4は珠洲片口鉢で、3の蓋として用いられたものである。器高9.2cm、口径18.2cm、底径9.6cmを測る小型品で、やや膨らみつつ立ち上がる器形をなす。口縁端部はしっかりと面を取るもの、内面側は上方に突き出し、外面側はやや丸みを帯びる。注口は丁寧にU字状に挽き出される。外面は右側面に柳状工具による加飾が施される。底部は内外面ともに焼き彫りしているがそのまま使用され、外底面には回転糸切り痕をとどめる。焼成は還元焼成、色調は灰色を呈し、内面に降灰による自然釉と器面の荒れが認められる。これも珠洲焼編年I期のものと考えた。

5は短刀であり、切先及び茎尻を欠失する。現存長は26.5cm、復元刃長は24.0cm、刃元幅は2.6cmを測る。刀身に反りではなく直線的で、関部は棟区が直角関、刃区が撲関をなす。茎部には目釘穴が1つ認められる。

2-2号經塚出土遺物（図版3） 図版3-1・2は2-2号經塚出土。1は珠洲経筒外容器で、身と蓋を合わせた総高は28.0cmを測る。体部がわずかに膨らみながら内湾しつつ立ち上がる円筒形の身は、器高25.7cm、口径16.2cm、胴部最大径17.8cm、底径17.0cmを測り、いわゆる経筒BII類に分類される。素縁の口縁端部は外側に傾斜する端面を取るが、外側は丸みを帯びる。また、口縁端部より0.5cmほど下りた外面には棒状工具による縱一文字の記号がある。組作り成形の後内外面とも織懸捺で調整を施し、さらに幅2cmほどの板状工具の端面によって外面は上方から下方へ

と搔き下ろし、内面は下方から上方へと搔き上げて仕上げる。内面には一部粘土紐の接合痕が、内底面には多数の指圧痕が残る。外底面は不明瞭ながらも一部に糸切り痕をとどめる。焼成は還元硬質、色調は暗灰色を呈する。外面は一部降灰による自然釉がかかるが、内面全体及び蓋で隠れる部分には一切認められず、蓋をした状態で同時に焼成されたものであろう。蓋は器高8.1cm、口径24cmを測り、広い底部とそこから急角度に立ち上がる鉢状の器形を取る。しっかりと端面を取った口縁から1.5cmほど下がったところに蓋の外端部を意識したような段を施せ、その上に横一文字の記号が描かれている。内外面ともに輻輳成形痕を残し、蓋上面にはU字状の無数の櫛描文、外側面には斜位の櫛描文を施す。焼成は還元硬質で色調は灰色を呈し、外面の一部には降灰による自然釉がかかる。これらはともに珠洲焼編年Ⅰ期の範疇に入るものと考えた。

2は短刀で、切先を若干欠尖する。現存長31.1cm、復元刃長23.8cm、刃元幅2.6cmを測る。刀身は直線的で、関部は棟区・刃区とともに直角角で茎部に至る。茎部長は8.4cmを測り、茎尻は丸みを帯びて尖る。木質は茎部に一部遺存するのみであるが、関部付近の柄には半円形の痕跡があり、呑口構造の合口拵えであったことが想定できる。

3号経塚出土遺物（図版3・4） 図版3-3～図版4-7は3号経塚出土。図版3-3は珠洲経筒外容器で、身と蓋を合わせた総高は38.8cmを測る。胴中位に重心を置いて膨らみ、内湾して立ち上がる円筒形の身は器高26.8cm、口径18.5cm、胴部最大径20.9cm、底径16.2cmを測り、いわゆる経筒BII 1類に分類される。素縁の口縁端部は若干内傾しながらも明確な端面を取る。口縁端部より3.5cmほど下に横一文字の記号を入れる。内面には部分的に粘土紐の接合痕が残り、組作り成形の後に内外面とも輻輳撫で調整によって仕上げている。外底面は糸切り痕を撫で消した後に先端の丸い棒状工具によって5行18文字に及ぶ刻銘が施される。この銘文は「ふち二ね ふちわらの 国公 有近八月十四日」と読むことが可能で、1行目の「ふち二ね」を「文治二年」、つまり西暦1186年の略であるものと考えると、多くの出土遺物が示唆する本經塚群の造営時期（12世紀後半）と合致する。しかしながらまだ解釈の余地は残されており、銘文全体の意味も含めてなお検討を要する。焼成は還元硬質、色調は暗灰色を呈する。外面は広範囲にわたって降灰による自然釉がかかるが、内面及び蓋で隠れる部分には一切認められず、蓋をした状態で同時に焼成されたものであろう。蓋は器高14.8cm、口径23.5cmを測り、浅鉢状の本体とその頂部に付加された装飾部からなる。口縁部はやや内湾しながら開き、外側に傾斜する明確な端面を持つ。蓋頂部（外底面）には装飾部の接合面から糸切り痕が確認できる。内外面ともに輻輳成形痕を残し、外面は全体にわたって蓮華の花弁を八方に櫛描きをしており、さらにその花芯部にあたる蓋頂部には四方火焔をもつ宝珠を頂く。この四方火焔宝珠は手捏ねで成形・付加されたもので、櫛描はその部品上にも及んでいることから、装飾部の付加後に櫛描がなされたことが窺える。焼成は還元硬質で色調は灰色を呈し、外面の一部には降灰による自然釉がかかる。これらはともに珠洲焼編年Ⅰ期の範疇に入るものと考えた。

図版4-1は青白磁合子である。身は器高2.35cm、口径6.85cm、底径6.4cm、蓋は器高1.8cm、口径7.8cmをそれぞれ測り、身と蓋を合わせた総高は3.65cmとなる。身・蓋ともに側面を26単位の凹凸によって菊花様の形態にかたどった淡青白色の合子で、経塚出土品としては極めて典型的な部類に入る。蓋上面にはうっすらと花弁や葉の文様が確認できるが彫りが浅く、文様の詳細については不明である。

2は青白磁小壺である。器高4.2cm、口径2.6cm、胴部最大径6.1cm、底径2.9cmを測る。やや重心の高い球状の胴部にごく短く突出する口頭部を取り付く。肩部には段が廻り、それより下位は回転ヘラ削り、そこから内面にかけては輻輳撫でで調整する。外底面と内面の一部を除くほぼ全体に若干青みがかった乳白色の釉がかかる。外底面は回転ヘラ切りの痕跡が残るが、摩滅している。

3は火打金である。偏平な二等辺三角形の両端を持ち上げたような形態をなし、身部分の幅・高さはそれぞれ7.8cm・2.9cmを測る。上部は薄く下端に近づくほど厚くなり、最大厚は0.5cmを測る。孔は認められない。なお、図

中左側の端部付近には布状の压痕が鉛上に残り、布に包んだ状態で埋納された可能性がある。

4～7は短刀である。4は切先と関部以下を欠失する。現存長25.9cm、現存刃長25.0cm、刃部幅2.9cmを測る。刀身は直線的である。木質の遺存はないが頭部付近には半円形の痕跡があり、呑口構造の合口持平であった可能性がある。5は切先と茎尻を欠失する。現存長29.4cm、復元刃長23.3cm、刃元幅2.7cmを測る。刀身は内反りとなり、関部は棟区・刃区とも直角開で茎部に至る。茎部には中ほどに目釘穴が1つ存在する。部分的に木質が遺存する。6は茎部の目釘穴を焼に茎尻を欠失する。現存長23.9cm、刃長20.3cm、刃元幅2.5cmを測る。刀身は直線的で、関部は棟区が斜開、刃区が直角開となる。一部に木質が遺存する。7は完形品で全長27.3cm、刃長18cm、刃元幅2.75cmを測る。刀身は直線的ながら刃先がややふさり、棟も他のものとは異なり中央部がやや高くなっている特徴を呈する。関部は直角開とも直角開で茎部に至る。茎部長は9.3cmを測り、茎尻は丸みを帯びています。茎部には中央刃部寄りに目釘穴が1つ存在する。

7-2号経塚出土遺物(図版4) 図版4-8・9は7-2号経塚出土。8は珠洲四耳壺で、経筒外容器として用いられたものである。器高24.1cm、口径10.4cm、胴部最大径19.6cm、底径10.4cmを測り、いわゆる壺R種A II類に分類される。倒卵形の体部からやや開きながら立ち上がる口頭部は、口縁部において外反した端部にしっかりと面を取り、その外端を嘴状に形成する。環状把手は幅5.8cm、高さ1.5cm前後で斜め前方に立ち上がる。環状把手の間には「大」の字の記号を刻む。内外面ともに輪轂成形の痕跡を残し、上胴部には横位の太い櫛描波状文が少なくとも3度に分けて施される。外底面には不明瞭ながらも糸切り痕をとどめる。焼成は還元硬質で色調は概ね灰色を呈し、全体的に降灰による自然釉がかかる。珠洲焼編年I期に属するものと考えた。

9は珠洲片口鉢で、8の蓋として用いられたものである。器高10.9cm、口径23.9cm、底径9.6cmを測る。若干直線的ながらも膨らみをもって立ち上がり、口縁部は内済ぎみにおさめる。口縁端部は外傾しつつ2面で構成されて端部中央に弱い稜が現り、内端・外端ともにやや突出する。注口部付近は古く欠損し、破損面は一部摩滅している。外底面には静止糸切り痕をとどめるが一部摩滅している。焼成は還元軟質、色調は概ね黄灰色を呈する。珠洲焼編年I期の範疇で捉えられるものと考えた。

9号経塚出土遺物(図版5・6) 図版5-1～図版6-5は9号経塚出土。図版5-1は珠洲四耳壺で、経筒外容器として用いられたものである。器高25.2cm、口径10.5cm、胴部最大径19.8cm、底径10.3cmを測り、いわゆる壺R種A II類に分類される。倒卵形の体部から短く立ち上がる口頭部は外反した口縁端部にしっかりと面を取り、その内端を上方に摘み上げる。環状把手は幅6.6cm、高さ1.5cm前後で斜め前方に立ち上がる。接合部は丁寧に撫で付けられ、把手中央部は強めに摘む。内外面ともに輪轂成形の痕跡を残し、特に内面は約1cm幅の密で明瞭な輪轂目をとどめる。胴部には上位2/3ほどにわたって横位の櫛描波状文が一筆書きで施される。外底面には回転糸切り痕をとどめる。胎土は精良緻密、焼成は還元硬質で色調は概ね灰色を呈する。降灰による自然釉は認められない。全体的に精緻な作りで繊細な印象を受ける。珠洲焼編年I期に属するものと考えた。

2は珠洲片口鉢で、1の蓋として用いられたものである。半剖品で注口部分は含まれないが、破断面付近で口縁外周が内側に入り込む様子が確認でき、その延長に注口の存在が窺われる。器高11.7cm、口径24.9cm、底径10.4cmを測る。膨らみをもって立ち上がる半球状の器形をなし、しっかりと面を取った口縁端部はやや外傾する。内面には約1cm幅の密で明瞭な輪轂目を残している。外底面には回転糸切り痕をとどめる。焼成は還元硬質、色調は概ね灰色を呈する。珠洲焼編年I期の範疇で捉えられるものと考えた。

図版5-3～図版6-3は短刀である。図版5-3が茎尻、図版6-1が切先を欠失する以外はほぼ完形である。以下に、各短刀について現存長・刃長(復元)・刃元幅・茎部長(現存)の計測値を記す。

図版5-3: 23.0cm、20.0cm、1.9cm、(3.4cm) 図版5-4: 34.0cm、25.0cm、3.2cm、9.0cm

図版5-5: 30.5cm、22.4cm、2.5cm、8.0cm
図版6-1: 28.1cm、(22.3cm)、2.3cm、7.9cm
図版6-3: 33.5cm、24.2cm、2.7cm、8.8cm

図版5-6: 30.7cm、24.6cm、2.6cm、9.0cm
図版6-2: 31.4cm、22.7cm、2.5cm、8.1cm

これらは図版6-3のみ切先が若干ふさる以外は全て平造り・平棟造りで直線的な刀身をなし、またいずれの短刀も関部は櫛目・刃区ともに直角關となる。茎部には中央刃部寄りに1つの目釘穴が貫通するが、図版5-6のみ2つ認められる。茎尻はいずれも尖りぎみにおさまる。7口全てに木質が遺存し、図版5-4・6・図版6-1は呑口構造の合口指えであったことがわかる。図版6-1では柄縁に樹皮様のものが巻かれている。なお、図版6-3の関部付近には後述する棒状鉄製品の断片が銹着している。

4・5は棒状鉄製品である。4は全長12.8cmの棒状で断面形は中央部で0.4cm四方の方形をなす。左端は匙状に面取りし、右端は先細りとなり筒状の突起物がある。5は両端を欠失し、現存長は7.0cmを測り、断面形は0.4cm四方の方形をなす。右半部は右回りに一回転ねじられている。左端は2片が重なるようであるが、欠損している。鈎状になるものであろうか。これらは紡錘車の紡茎の可能性がある。

10号経塚出土遺物（図版6） 図版6-6~10は10号経塚出土。6は珠洲壺で、経筒外容器として用いられたものである。口縁部の一端を欠くがほぼ完形である。器高37.8cm、口径23.9cm、胴部最大径35.0cm、底径14.3cmを測る中壺で、壺T種C1類に分類されるいわゆる短頸球胴壺である。口頸部は直立に近い状態で短く立ち上がり、口縁端部は上端を摘みぎみにおさまっている。成形は胴上部と胴下部が龍鱗成形で、その間を埋めるように外面は右下がりの矢羽根状の叩目を施し、それに対応する内面は当具痕を横位に撫で消した痕跡が残る。肩部には「の」の字状の記号が刻まれている。底部は砂底であるが、底部鉢形成形時の糸切り痕がうっすらと確認できる。焼成は還元硬質で色調は概ね灰色を呈し、一部には降灰による自然釉がかかる。珠洲焼編年Ⅰ期に属するものと考えた。

7は銅鏡で、直径9.9cmの草花蝶鳥鏡である。厚さは鏡胎無文部で約0.1cmを測り、薄手である。縁部は鏡胎部よりもやや厚手の中継で、その高さは0.6cmを測る。鏡背中央には不明瞭ながらも径1.6cmの菊花様の鉢座があり、径0.7cm、高さ0.2cmほどの裁頭円錐状の鉢が乗る。鉢には径0.2cmほどの円形の孔が鏡胎を一部抉るようにして貫通する。鏡背面には径7.5cmの界囲が廻り、一部それと重なるようにして草花、2羽の鳥、2（ないし3）匹の蝶がそれぞれ構図の上下を統一して配置されている。草花は7に図示した向きで下から上に向けて伸び、鉢を境に下位には2羽の鳥が右向きに並んで飛び、鉢の上位では2匹の蝶が同じく右向きに舞う。

8~10は6の壺中より検出した不明鉄製品である。いずれも破片で接合こそしないものの、本来は同一の個体であった可能性が高い。棒状の部分は断面方形～長方形を呈し、8の先端部分は板状に薄く広がり、9の先端は側面で見るとU字状に曲がる。以上の特徴からはこれらが和鉄の断片である可能性を指摘できるが、詳細は不明である。

11号経塚出土遺物（図版7） 図版7-1~6は11号経塚出土。このうち1・2は昨年度既に報告した珠洲壺・片口鉢である。1は珠洲壺の口縁部で、口径22.0cmで平縁状の口縁に沈線を施す。2は珠洲片口鉢で、1の蓋であったものと考えられる。器高12.2cm、口径27.4cm、底径12.0cmを測る。膨らみをもって立ち上がる器形をもち、口縁外端はしっかりと面を取る。注口は口縁の外周線にコの字状に丁寧に作られている。外底面に回転糸切り痕を残す。焼成は還元硬質、色調は黄灰色を呈する。これらはともに珠洲焼編年Ⅰ期に属するものと考えた。

3・4は銅鏡である。3は直径11.0cmの草葉双鳥鏡である。厚さは鏡胎無文部で約0.2cmを測る。縁部は鏡胎部とほぼ同じ厚さで立ち上がる網縁で、その高さは0.9cmを測る。鏡背中央には径1.7cmの円形の鉢座があり、径0.9cm、高さ0.3cmほどの半球状の鉢が乗る。鉢には径0.3cmほどの半円形の孔が貫通する。鏡背面には径8.2cmの界囲が廻り、萩と思しき草葉が絡み、その内側に2羽の鳥が配置されている。本鏡は構図上の上下の区別はないようで、図中で鉢の左に位置する鳥は左側を下方にして図の下側に向かって飛翔する。それに対し鉢の右側に位置する鳥は図の下を下

方として木の枝にとまる。本鏡の製作年代は12世紀第3四半期に位置づけられる。

4は直径9.75cmの唐草双鳥鏡である。直径に比して鏡胎は厚く、無文部で0.2cmを測る。縁部は断面が三角形に近い蒲鉾形で、その幅・高さとも0.4cmを測る。中央には長径0.9cm、短径0.5cmの長円形を呈する高さ0.25cmの半球状の鉢が鉢座を介さずに乗り、その短軸方向に径0.2cmの鉢孔が内側から鼓状に貫通する。無界囲で、鉢を挟んで唐草と飛翔する鳥が1対ずつ配置されるが、鳥はいずれも鉢を上方としている。鏡面には紙片が広い範囲にわたって残存しており、埋納時には和紙で包まれていたことが窺える。本鏡の製作年代は12世紀前半に位置づけられる。

5・6は短刀である。5は切先・刃口側の闇部・茎尻を欠失する。刀身中央部付近と闇部でそれぞれ逆方向に曲がり、意図的に折り曲げられた可能性がある。現存長は23.6cmを測る。刀身に反りではなく、直線的である。闇部は棟口で直角闇をなして直線的な茎部へと至る。茎部には月釘穴が1つ認められる。木質は茎部のみ残る。6は切先と茎尻を欠失する。現存長24.4cm、復元刃長22.1cm、刃元幅2.6cmを測る。刀身に反りではなく直線的で、闇部は両撫闇をなすようである。柄縁には半円形に木質が残り、呑口構造の合口摺えであったようである。

29号塚出土物(図版7・8) 図版7-7～図版8-4は29号塚出土。図版7-7は集石中央部付近より破片で出土した珠洲壺で、欠損部分が大きく不明な点が多いが、器高約70cm、口径約45cm、胴部最大径約67cm、底径18.6cmを測る。口刷指数は67で広口壺の範疇に属するものであるが、壺としては規格外の大きさであり、変則的な壺としてよいものかも知れない。長胴に近い肩の張る倒卵形の体部に断面コの字形の口頭部が取り付き、壺部はほぼ水平に挽き出される。体部は底部の鉢形部分を除く外側全体に右下がりの平行叩きを施し、内面は当具痕を不定方向の指撫によって撫で消している。なお、接合しなかった肩部破片には「の」の字状の記号が刻まれている。外底面は砂底である。大型品のため部位によるばらつきがあり一様ではないが焼成は概ね還元軟質、色調は黄灰色ないし灰褐色を呈する。珠洲焼編年Ⅰ期～Ⅱ期の範疇で捉えられるものと考えた。

8は火打金である。偏平な二等辯三角形の両端を持ち上げたような形態をなすが、左端部を欠失する。身部分の復元幅・高さはそれぞれ10.0cm・3.3cmを測る。上部は薄く下端に近づくほど厚くなり、最大厚は0.7cmを測る。孔などは認められない。

図版8-1は珠洲壺である。口縁部を一部欠くものは完形で、器高22.1cm、口径12.1cm、胴部最大径16.8cm、底径8.4cmを測り、いわゆる壺R種AⅠ類に分類される。倒卵形の体部より開きながら立ち上がる口頭部は、口縁部において外反した後に内済ぎみに丸くおさめる。内外面とも輪廻成形痕を残し、肩部には櫛描波状文が一筆書きで2段廻らされる。その波状文を切るかたちで「十」の記号が刻まれる。外底面は不明瞭ながらも静止糸切り痕を残す。焼成は還元硬質で色調は概ね暗灰色を呈し、一部に降灰による自然釉がかかる。珠洲焼編年Ⅰ期～Ⅱ期の範疇で捉えられるものと考えた。2は珠洲片口鉢で、1の壺として利用されていたものである。割れた状態で出土し全体の1/3ほどを欠失する。器高14.5cm、口径36.6cm、底径10.4cmを測る。若干直線的ではあるが膨らみをもって立ち上がる器形をなし、口縁端部は水平にしっかりとした壺面を形成する。注口は口縁外周に「コ」の字状に丁寧に挽き出されている。内面には1の壺同様「十」の記号が刻まれる。外底面には静止糸切り痕が残る。焼成は還元硬質で色調は概ね黄灰色を呈するが、1の壺中に落ち込んでいた破片はいずれも灰白色を呈していた。降灰による自然釉等は確認できない。これも1の壺同様、珠洲焼編年Ⅰ期～Ⅱ期の範疇で捉えられるものと考えた。

3・4は半成11年度に実施した分布調査において採集された珠洲壺・片口鉢である。過去に2度報告しているのでここでは簡略に述べる。3は器高22.9cm、口径11.5cm、胴部最大径17.1cm、底径8.1cmを測る壺で、いわゆる壺R種AⅠ類に分類される。内外面に輪廻成形の痕跡が残り、外底面に静止糸切り痕を残す。頭部から肩上部に一筆書きの2段の櫛描波状文が廻り、その他2箇所に縱位の波状文を施す。焼成は還元硬質、色調は黄灰色を呈する。4は3の壺と考えられる珠洲片口鉢で、器高8.8cm、口径21.2cm、底径8.1cmを測る。膨らみをもって立ち上がり、口縁端部はしつ

かりと面を取る。外底面には静止糸切り痕を残す。焼成は還元硬質、色調は灰褐色を呈する。3・4ともに珠洲焼組年のⅠ期に属するものと考えた。

輸入磁器(青白磁、図版8) 図版8-5は8-1号経塚出土の青白磁小杯である。器高1.8cm、口径4.0cm、底径2.2cmを測る極めて小型の杯である。胴部下半に明確な稜が立ち、それより下位は回転ヘラ削り、その他は輪轂撫でによって調整されている。施釉は概ねその稜を境に上位になされる。外底面は回転ヘラ切り痕を残すが、摩滅している。

6・7は13-2号経塚出土の青白磁である。6は小壺で、器高3.8cm、口径2.85cm、胴部最大径6.0cm、底径2.85cmを測る。形態的特徴は3号経塚出土のものとほぼ共通するが、本品の方が偏平である。釉調も若干異なり、本品のものはやや黄みがかっている。以上のような相違点はあるものの共通性は高く、同工とまではいかなくとも同一生産地の品である可能性が高い。7は稜花皿で、器高1.4cm、口径7.9cm、底径3.1cmを測る。経塚出土品としては稀な例に属するもので、外反する口縁部には等間隔で6箇所の切り込みがあり、それから中心に向けて一本ずつ細い突線が走る。また、内面にも径5cmほどの円形に突線が廻る。外底面を除く全ての部分に淡く青みがかった釉が施されている。外底面には回転ヘラ切り痕を残す。

鉄製品(図版9) 図版9-1~6は上記以外の経塚遺構に伴って出土した短刀である。1~3は5号経塚から出土したもので、現存長はそれぞれ25.5cm、26.4cm、24.2cmを測る。いずれも刀身に反りではなく直線的で、1・2は両撫闘をなす。3は1・2が平棟造りであるが3のみ庵棟状である。全体的に木質が良好に遺存し、2は梢口部が半円形に抉れ、巻口構造の合口捲えの可能性がある。3は柄部全体が木質に覆われる。

4は7-1号経塚出土のもので、刀身部の1/3ほどと茎尻を欠失し、側面観は大きく湾曲している。現存長は19.7cmを測る。木質が良好に遺存し、図示し得なかった裏面では巻口構造の合口捲えを示す梢口・柄縁が認められる。

5は8-1号経塚出土で、昨年度にも報告したものである。完形品で全長33.9cm、刃長27.2cm、刃元幅3.1cm、を測る。庵棟造りの刀身は直線的であるが、刃先はややふさる。関部は棟区・刃区とも直角闊をなして長さ6.7cmの茎部へと至る。部分的に木質が遺存するが捲えは不明である。

6は13-1号経塚出土。切先と茎尻をわずかに欠失するが全形を復元可能で、復元全長28.7cm、復元刃長22.3cm、刃元幅2.6cm、復元茎長6.4cmを測る。刀身は反りがなく直線的で、関部は両直角闊をなす。

7は集石30の横から出土した現存長5.7cm、幅2.0cmの刀物断片である。両刃造りで、両面に鏽が認められる。

土師質皿(図版9) 図版9-8~11は16-2号経塚南の土師質皿・炭化物集中域から細片となって出土した土師質皿である。8は器高3.8cm、口径12cm、底径5.0cmに復元し得た。輪轂成形で、端部は丸くおさめる。胎土は粗く1mm人の砂礫を多く含む。9は底径3.9cmを測る底部破片で、外底面には不明瞭ながらも回転糸切り痕を残す。胎土はやや粗い。10は底径4.3cmを測る底部破片で、底部は低い柱状を呈する。外底面には回転糸切り痕が残る。胎土はやや粗い。11は手捏ね成形のもので、底部は長径4.8cm、短径4.5cmの略円形を呈する。胎土は粗く1mm大の砂礫を含む。

珠洲(図版9~12) 図版9-12~図版12-16は珠洲で、個別に取り上げなかった経塚・集石より出土したものである。図版9-12~14は、経筒外容器及び蓋である。12は5号経塚の集石中より出土した経筒外容器の蓋である。口径17.0cmの鉢形の器形をなし、口縁端部はしっかりと面を取って外端を外に拡み出す。内外面ともに輪轂成形痕を残し、外面には一部引っ掻いたような痕跡がある。焼成は還元硬質、色調は概ね灰色を呈する。13・14は13-1号経塚から破片となって出土した経筒外容器の蓋と身である。接合するものが少なく全体形は不明で、図示したものは各破片をおおよその位置に置いた後元図である。13は蓋で、高さは2.5cm、口径は19cmほどを測る。平坦な蓋上面とそこから垂下する縁部をもち、端部は丸くおさめる。胎土は砂礫をほとんど含まず非常に緻密であるが焼成はあまく、軟質である。色調は灰色を呈する。14は13に対応する身である。胴部が中央付近で緩く括れる円筒形の器形をなすものと考えた。口縁端部はしっかりと面を取る。内外面ともに胴上半部には輪轂調整の痕跡が残るが、下半部は不明瞭である。外面

は轆轤調整の後に縱方向の撫でを施しているが弱い。胎土には砂礫と海面骨針を含み珠洲産であることがわかるが焼きが悪く、瓦質に近い。色調は暗灰色を呈する。13・14とともに他の経筒外容器とは雰囲気が異なり、西日本で盛行した瓦質経筒の影響があったものかも知れない。

図版10-1~7は壺の口縁部付近の破片である。1は集石24出土で口径は28.0cmを測る。外反して面を取った口縁端部には中央に棱が立つ。2は集石20出土で口径は27.0cmを測る。口縁部は外反し、端部はしっかりと面を取る。3~5は集石25出土で、いずれも側体を異にする。3は外端面に凹線が廻る三角形状の口縁をなし、上端は丸くおさめる。4は口縁端部を欠くが、残存状況から判断すると10号経塚の壺（図版6~6）のように短く立ち上がる口縁部となるようで、その復元口径は約20.0cmとなる。5は喇叭状に短く挽き出された口縁端部である。6は集石22、7は平坦面3の第3トレンチ出土で、ともに口縁端部に棱が廻り類似するが、別個体のものと考えられる。これららの口縁部破片はいずれも珠洲焼編年のⅠ期~Ⅱ期の範疇に入るものと考えた。

8~16は壺の肩部破片である。8・9・12は集石25出土で同一個体のものであり、平坦面3第2トレンチ出土の14もその可能性が高い。頸基部より一段下がった位置から右下がりの平行叩きを施す。胎土や焼成具合から判断すると、これに接続する口縁は3であったものと考えられる。10は集石26出土で、その他は平坦面3の試掘トレンチからの出土である。そのうち15・16はいわゆる壺R種A類の肩部で、横位の櫛描波状文が認められる。

17は平坦面3第1トレンチ出土で、轆轤成形小壺の底部付近の破片である。18は集石25から出土した壺の底部で、底端部から4cmほど上がった位置より右下がりの平行叩きが施される。

図版10~19~図版11~14は壺あるいは壺の体部破片である。図版10~19~21は集石19から出土したもので、同一個体である。22は13~2号経塚の集石中より出土したものであるが、胎土や焼成具合から判断すると19~21と同一である可能性が高い。図版11~1は集石20、2は集石21、3は集石23、4~6は集石24、7~10は集石25、11は集石27、12は集石28、13~14は平坦面3試掘トレンチから出土したものである。

図版12~1~16は片口鉢である。1は7~1号経塚出土で、器高8.8cm、口径14.9cm、底径6.5cmを測る小型品である。膨らみをもって立ち上がる深い半球状の器形をなし、口縁端部はその先を切り落としたかのようなシャープな端面を取る。注口は欠失しているが、内面の一部にその痕跡を残す。外底面には静止糸切り痕を残す。焼成は還元硬質で色調は灰色を呈し、口縁部と内面に降灰による自然釉がかかる。珠洲焼編年のⅠ期に属するものと考えた。2は16~3号経塚出土で昨年度は集石16~17出土として報告したものである。器高9.3cm、口径25.0cm、底径8.0cmを測る。膨らみをもって立ち上がり、口縁端部でしっかりと面を取る。内面には轆轤成形時の段が強く残る。外底面には回転糸切り痕を残す。焼成は還元硬質で色調は灰青褐色を呈する。珠洲焼編年のⅠ期に属するものと考えた。

3~11は口縁部破片である。3は16~2号経塚出土で、口径は32.0cmを測る。外傾する明瞭な端面を取り、内端はやや突出する。4は集石21からの出土で、口径は27.0cmを測り、端部はしっかりと面を取る。5は集石25出土で、口径は14.0cmを測る小型品である。口縁部は端部より一段下を強く撫で回して丸みを帯びた口縁帶を形成し、内面の一部には横位に櫛描状の文様が認められる。なお、7~11はこれと同一個体の可能性が高いが、注口部破片の11は1本の指でU字状に注口部を引き出すものである。珠洲焼編年のⅠ期~Ⅱ期の範疇で捉えられるものと考えた。6は集石26出土で、口径13.0cmを測る小型品である。口縁端部にはしっかりと面を取る。8は平坦面3第2トレンチ出土で、小破片ではあるが端部にはしっかりと面を取る。9~10は注口部の破片で、9は17号経塚石櫛中、10は集石25から出土したものである。

12~16は片口鉢の体部破片で、12が2~2号経塚南側の崖下で採取したものである以外は、全て平坦面3北側の集石中より得たものである。

その他の遺物（図版12） 図版12~17は集石30の横から出土した素焼きの土人形である。胴体裏面と下半身を欠き、

現存長は7.85cmを測る。手捏ねではなく型押しによって作られたもので、中空となる胴体部分の内面には布を当てて指で押しつけた痕跡が残る。18は集石25・26の南から出土した石硯の破片である。長方硯の長側縁の破片で、現状では長さ5.5cm、幅2.9cm、厚さは隙部で1.3~1.9cm、堤部で2.3cmを測る。安山岩製で、側面の一部から底面全体にかけて研磨面が剥落している(岡中網京都)。墨痕は確認できない。埋経に伴う写経で用いられたもの可能性があるが、詳細は不明である。19は平坦面3第5トレンチから出土したサイコロである。一辺1.5~1.8cmの不整な立方体で、目の配列は現在のものと共通する。材質は不明であるが非常に硬く、プラスチックなどの化学樹脂ではなく石製の可能性がある。

黒川・護摩堂周辺の分布調査について(第25・26図)

今年度は黒川地区と護摩堂地区を結ぶ林道沿いを中心に分布調査と簡易測量を実施した。調査は、富山大学人文学部考古学研究室の全面的な協力の下、調査担当者及び院生・学生が行なった。今年度は調査対象地区が広範囲であったため、まず調査地区全域の踏査を先行して行なった。その結果、大小15ヶ所に及ぶ平坦面及び平坦面群を確認し、その上で特に規模の大きい以下の3地点に統って簡易測量を行なった。なお、これらはいずれも非常に大規模なもので、今回示し得た範囲が全てではなく、その外側にも大きな広がりをもつものであることを明記しておく。

平坦面18は、黒川地区と護摩堂地区とのほぼ中間で、林道が急角度に切返す地点の東側に位置する平坦面群を総称して名付けた。字名は岸天。標高は約140~180mにわたる。ここには地元で「仮岩」と俗称される露岩群があり、その周囲に多数の平坦面が小道を介して連なっている。平坦面は大きいもので50m×30mほどで、一部には塚状の高まりや集石も散見される。また、これらの平坦面群の背後の急斜面の中腹では、岩屋状の開口部をいくつか確認している。現在は杉の植林が行なわれている。

平坦面19は、護摩堂地区の八幡社の北西200mほどの位置に連なる平坦面群を総称して名付けた。字名は曲戸。標高は約320~350mにわたる。最高所に20m×10mほどの方形の平坦面があり、そこから下方に向かって大小様々な平坦面が展開し、山間寺院のようなあり方を見せる。平坦面の中には、木々の間を通して日本海まで望むことができるものもある。一部には塚状の高まりや集石が散見される。現在は竹林となっている。

平坦面20は、弘法大師巡錫の伝説が残る「弘法堂」の背後の山中から尾根上にかけて存在する平坦面群を総称して名付けた。字名は村巻。標高は370~470mにわたる。長さ約70mに及ぶ土壘状の高まりや、大きなもので50m×30mほどを測る平坦面などに加え、50基をはるかに越える多数の集石や塚を確認した。また、平坦面には一部に礫石と思しきものが並んでいるのも確認できた。現在は杉の植林が行なわれている。

以上が今年度の分布調査の結果である。これにより、これまで調査してきた一連の中世宗教遺跡が黒川地区的内部で完結するものではなく、護摩堂地区にかけても切れ目なく濃密に分布していることが明らかになった。今後は、その背後に間違いなく存在したであろう雞岳・立山信仰との関わりを視野に入れた、さらに幅広い調査が必要である。

V ま と め

前述の調査結果とそこから得られた見解を整理し、まとめに代えたい。

1. 円念寺山遺跡は、富山県中新川郡上市町黒川字舟ノ谷に所在する。遺跡は通称「円念寺山」と呼ばれる痩せ尾根の先端から約90mにわたって展開し、標高は85m前後を測る。
 2. 遺構は全体で39箇所を検出した。遺跡の中核をなす尾根上に位置する遺構の基本的な構造は、大きめの石によって作られた方形区画の中央部付近に土壙を穿ち、1枚の底石・4~6枚の側石・1枚の蓋石で構成される石槨を構築して埋納主体部とするものである。造営当初はその上部にも石積み・盛土を施していたものと推測される。
 3. 石槨は、地上に1基、集石地下に23基の計24基を確認した。全体に良好な残存状況を示しているが、本來納められていたであろう品物の多くはすでに抜き去られていた。しかし、被盗掘遺跡によく見られる徹底的な破壊の痕跡がないことや、埋納品の抜き取りの後にわざわざ蓋石を戻すなど集石を復元しているようなふしもあることなどから、単純な盜拵行為としては考えにくく、何か宗教上の理由などが想定できる可能性を考えた。
 4. 石槨のうち埋納当時の状況をとどめるものは6基である。石槨にはそれぞれ珠洲経筒外容器2・珠洲四耳壺3・珠洲壺1が中央に据えられ、その周囲（石槨内外）に副納品として銅鏡・青白磁・短刀・火打金などが納められていた。主体となる容器には内容物は残存しておらず確定的な物証はないものの、こうした遺物の種類や出土状況からこれらが経塚であるものと考えた。また、遺物が検出されなかった石槨もその構造から経塚と考えられ、本遺跡が23基以上の大規模経塚群であるものと考える。
 5. 出土遺物は、金銅製独鉢杵・銅磬・銅鏡・短刀・火打金・青白磁合子・青白磁小壺・青白磁棱花皿・珠洲経筒外容器・珠洲四耳壺・珠洲壺・珠洲片口鉢・石硯などであり、いずれも本遺跡の主体が経塚群であることを色濃く示すものである。
 6. 最も早い段階で尾根の先端に築かれたと考えられる1~1号石槨からは、金銅製独鉢杵と銅磬が石槨の片側に寄せ並べた状態で出土した。これらは寺院における法具として長年にわたる使用・伝世を経る品であり、このように石槨内に埋納される事例は極めて稀である。特にこの2者がセットで埋納されていたことが確認されたのは初例と考える。本経塚群造営にあたっての強い意志や折りの表われ、あるいは結界のようなものであったと考える。
 7. 金銅製独鉢杵は12世紀を降らない時期の埋納と考えるが、製作年代は11世紀代まで遡る可能性がある。
 8. 本経塚群の造営時期は、出土した珠洲などの編年觀よりその全てが12世紀後半で降らないものであると考える。特にはば完形で出土した珠洲経筒外容器・四耳壺・壺は経塚埋納用に作られた特注品と考えられるが、外容器蓋の端部及び四耳壺・叩壺の頭部・端部の形状から12世紀後半約50年に段階的に編年できるものと考えられ、他の経塚出土遺物もほぼその年代に比定される。
 9. 周辺遺跡には、黒川上山古墓群・黒川塚跡東遺跡・伝承真興寺跡があるほか、黒川の谷沿いに遺跡が数多く点在し、護摩堂周辺にまで延びている。中世の前半期を中心として、周辺一帯が密教を中心とする一人靈場であったものと考える。
 10. 立山信仰に関する入場口としては、立山町芦嶋寺・上市町大岩がこれまで想定されているが、上市町黒川・護摩堂もこれに加わる可能性が高く、滑川市的一部分も含む大きな広がりを見ることになると考えられる。
- 以上であるが、上市町内には大日岳山頂遺跡・大辻山祭祀遺跡・姫岳山頂遺跡など宗教上の靈山に遺跡の存在が確認されている。これまでこれらは立山信仰に関わる遺跡として「点」での理解にとどまっていたが、今回を含む黒川上山古墓群周辺調査で「線」として結びつきつつあり、常願寺川水系、芦嶋寺を中心とする近世立山信仰だけでなく12世紀代の立山信仰の姿を解明していく事ができるものと考える。

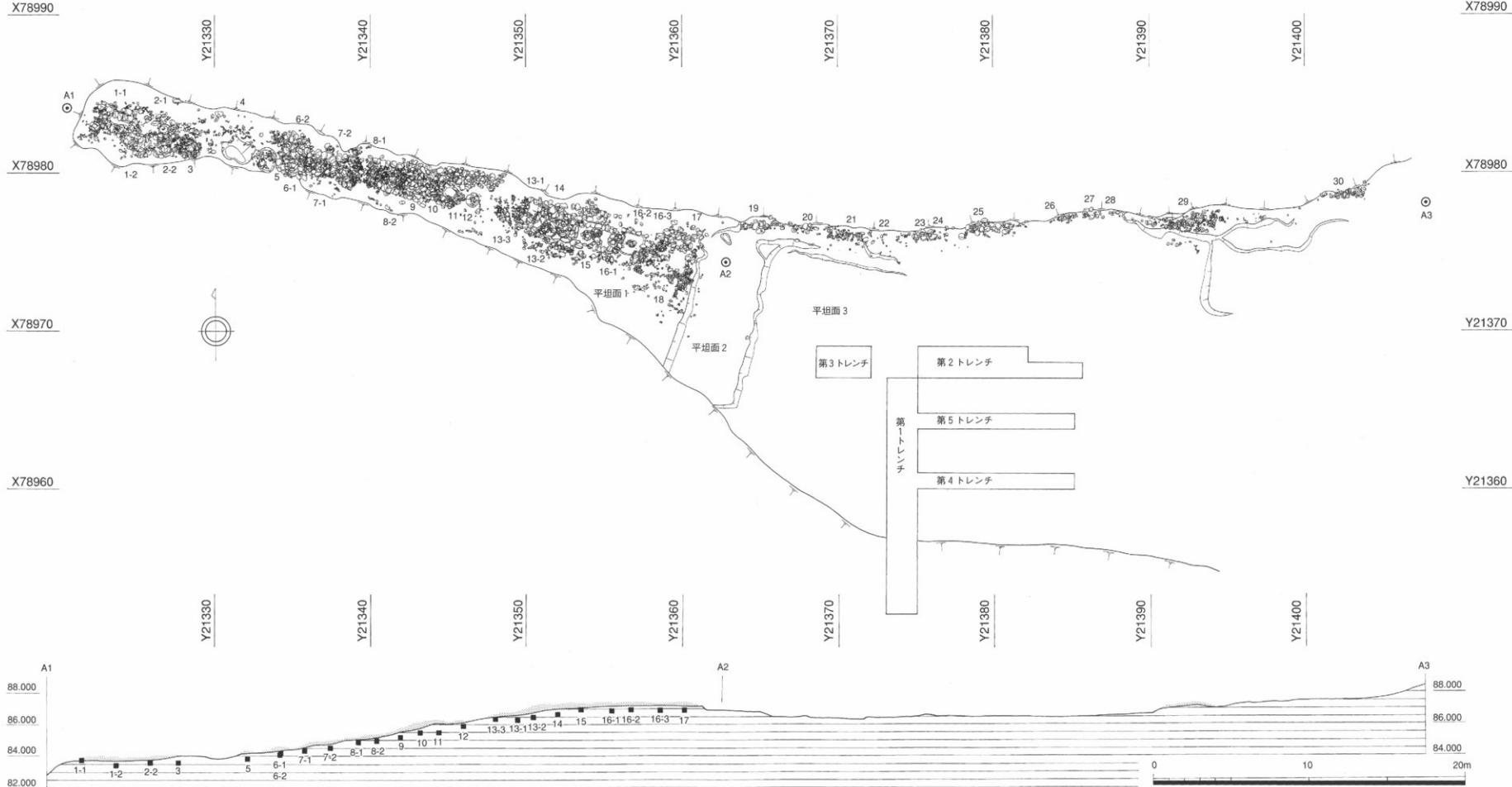
第1表 円念寺山遺跡遺物一覧表(第3図参照)

古 地	番 号	区	種 別	形 索	規 模 (cm)	埋 納 主 体 部	出 土 貨 物		備 考	参考図版
							幅	高		
	1-1号	石櫛	—	—	—	右櫛(削石4・底石1)	30×25×40	全削製點件1、鋸鋸1 石櫛が底石に露出	—	第4図、図版2
	1-2号	石櫛	長方形集石	200×100	—	右櫛(削石5・底石1)	—	—	—	第4図
	2-1号	石櫛	方形集石か?	180×150	石櫛(削石5・底石1・蓋石1)	60×30×45 刀1	珠洲四耳壺・片口鉢、短 縫邊状、二段添み 主体部完存	—	—	第5図、図版2
	2-2号	石櫛	方形集石か?	180×180?	—	石櫛(削石4・底石1・蓋石1)	25×20×30	珠洲鋸筒外容器、短刀1 珠洲鋸筒外容器(在銘)、 青白合1、青白磁小 臺1、切刃4、火打金1	—	第6図、図版3
	3号	石櫛	方形集石?	180×180?	石櫛(削石6・底石1)	60×45×45 —	—	—	—	第7図、図版3・4
	4号	不明	円形マツド?	200×200?	—	—	—	—	—	第3図
	5号	石櫛	方形集石か?	150×100	石櫛(半壇、側石4・底石1)等經	45×35×30? み、短刀13	珠洲鋸筒外容器(蓋片の 板根により崩壊 み)、短刀1	—	—	第8図、図版9
	6-1号	石櫛	長方形集石	300×150	石櫛(削石5・底石1)	55×30×40 —	—	—	—	第9図
	6-2号	石櫛	長方形集石	300×150	石櫛(削石5・底石1)	30×25×30	珠洲四耳壺・片口鉢 集石を共有する	—	—	第10図、図版9・12
	7-1号	石櫛	方形集石か?	180×180	石櫛(削石5・底石1)	70×50×40	珠洲四耳壺・片口鉢 短刀1	—	—	第11図、図版4
	7-2号	石櫛	方形集石か?	210×180	石櫛(削石5・底石1)	50×50×40	珠洲四耳壺・片口鉢 主体部完存	—	—	第12図、図版8・9
	8-1号	石櫛	長方形集石	230×?	石櫛(削石5・底石1)	30×25×40	青白磁小臺1、短刀1 のものか	—	—	第13図、図版5・6
	8-2号	石櫛	長方形集石	230×?	石櫛(削石5・底石1)	30×30×40	—	8-1号・9号とは 違 のものか	—	第12図
	9号	石櫛	長方形集石	220×120	石櫛(削石5・底石1)	35×35×30	珠洲四耳壺・片口鉢、短 刀7、棒状鉄製品2	—	—	第14図、図版6
	10号	石櫛	長方形集石	210×120	石櫛(削石5・底石1)	35×35×45 製品3、1脚	珠洲四耳壺(内部に不附 鉄製品3、1脚)	—	—	第15図、図版7
	11号	石櫛	方形集石	200×200	「コ」の字形の石柵、西に開く	50×40×30 2、短刀2	珠洲壺・片口鉢片、網鐵 網鐵は鐵血を合わせた状 態で出土	—	—	第16図
	12号	石櫛	小明	—	石櫛(半壇、側石3脚)	50×50×30?	元化置を選擇した割石で 埋まる	—	—	—

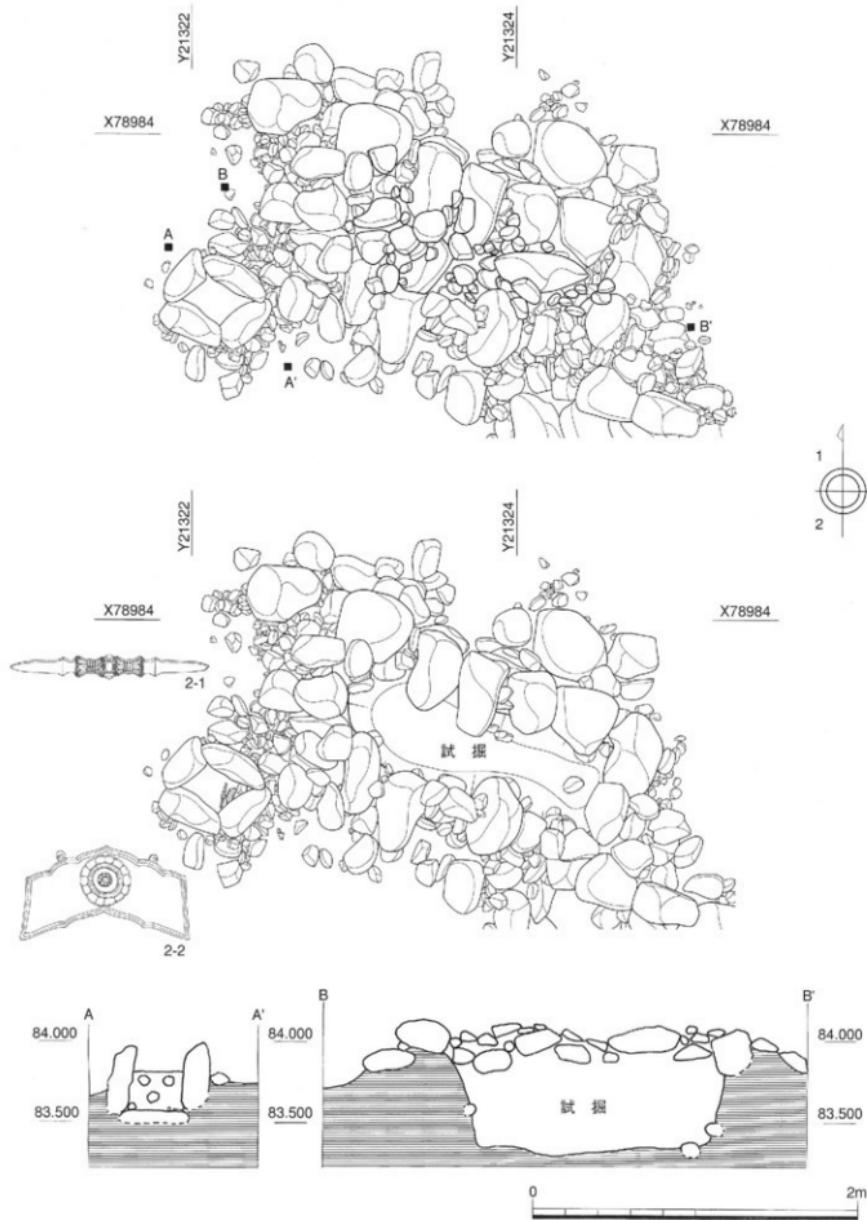
占地	番号	区種別	埋め土			堆積物	参考	参考図版
			面積(m)	形態	堆積(cm)			
平垣面1	13-1号	経保	長方形集石	200×120	石標(朝石6・底石1)	45×40×40	珠洲経保外容器片、短刀1	第18図、図版9
	13-2号	経保	長方形集石	200×120	石標?二面に側石状の石があり	40×40×30?	青口磁板花皿1、青山瓶	内外に微凹、部端部はいずれも外向き
	13-3号	経保	方形集石?	100×90?	石層(半壇、側石5・底石1層透)	25×25×25?	小窓1	上壁に張りつく、瓶底
	14号	経保	方形集石	180×180	石標(半壇、側石3層透)	60×50×40	残存する側石のうち1枚	元位置を保っていない
	15号	経保	方形集石	180×180	石標(朝石5・底石1)	30×30×30	—	第19図
	16-1号	経保	方形集石	180×150	石標(半壇、側石6層透)	60×60×45	—	第20図
	16-2号	経保	方形集石	150×150	石標(朝石4・底石1)	30×25×35	珠洲片口跡片	土壠の壁に側石を差せる 区画内より珠洲片口跡片
	16-3号	経保	方形集石か	120×120?	石標(朝石3)	30×30×50	珠洲片口跡片	出土
	17号	経保	方形集石か	210×210?	石標(半壇、側石みで構成)	25×20×45	珠洲片口跡片	石標内より珠洲片口跡片 出土
平垣面2	18号	不明	不定形集石	200×200	—	—	—	第23図、図版12
	19号	不明	不定形集石	300×100	—	—	珠洲蓋片	第23図、図版12
	20号	不明	不定形集石	200×100	—	—	珠洲蓋片	第3図、図版10
	21号	不明	不定形集石	300×100	—	—	珠洲蓋・片口跡片	遺物は集石中に敷布
	22号	不明	円形マグドカ	300×290	—	—	珠洲蓋	第3図、図版11・12
	23号	不明	不定形集石	100×100	—	—	珠洲蓋片	遺物は集石中に敷布
	24号	不明	円形マグドカ	200×290	—	—	珠洲蓋・片口跡片	第3図、図版11
平垣面3	25号	不明	不定形集石	450×150	—	—	珠洲蓋・片口跡片	遺物は先石中に敷布
	26号	不明	不定形集石	180×60	—	—	珠洲蓋・片口跡片	第3図、図版10・11
	27号	不明	不定形集石	150×90	—	—	珠洲蓋・片口跡片	集石は一部壘側に焼落
	28号	不明	不定形集石	150×60	—	—	珠洲蓋	集石は一部壘側に焼落
	29号	塙	土壘上集石	600×150	—	—	珠洲蓋 3、珠洲片口跡 2、火打金 1	珠洲蓋は2ヶ所が壘側に焼落、1点は集石中に破片焼落
	30号	不明	不定形集石	300×90	—	—	短刀片 1、土製人形	集石は壘側に焼落、運物は集石行

引用・参考文献

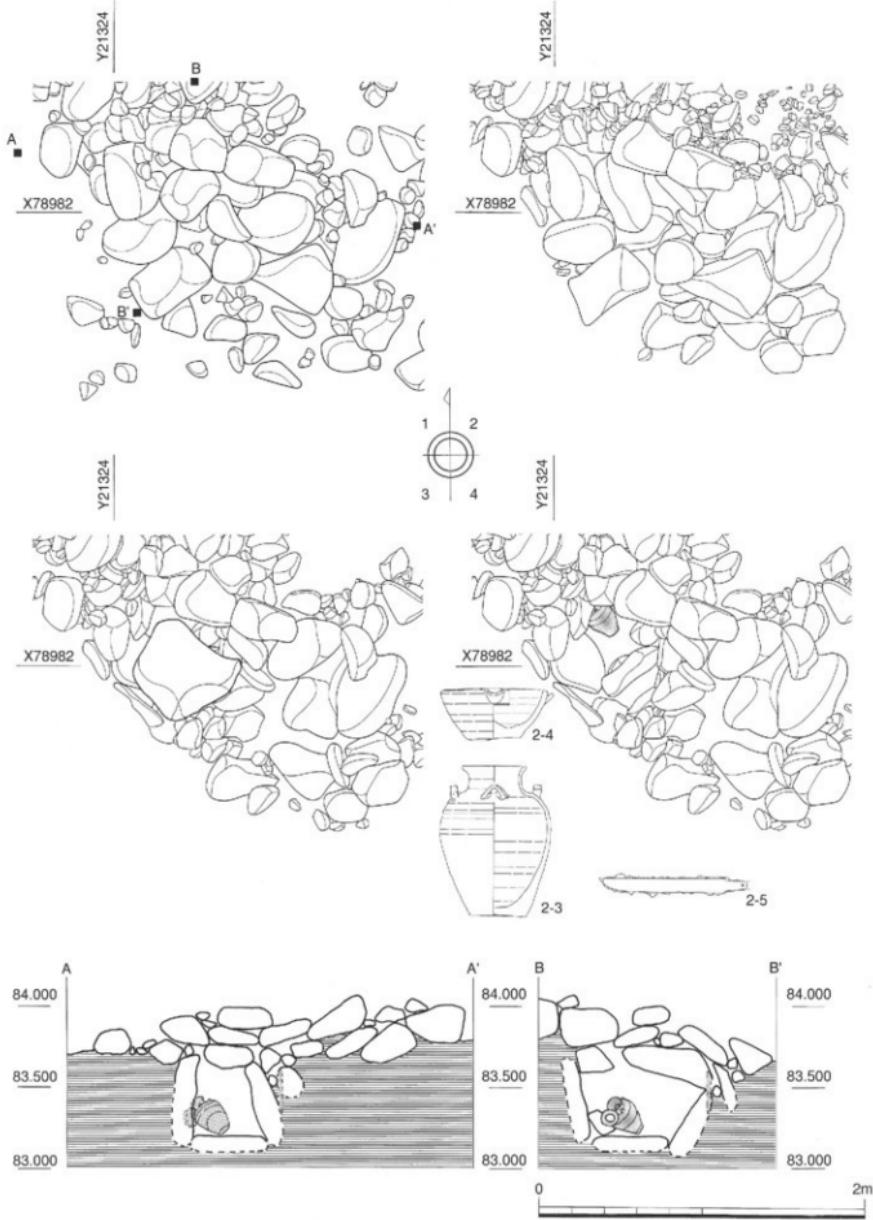
- ア 宇野隆大・西井龍儀他 1993 「第二章 医王の山と里の遺跡を探る」『医王山文化調査報告書 医王は語る』福光町・医王山文化調査委員会
- 岡崎讓治監修 1982 『仏具大辞典』鎌倉新書
- カ 鎌川 勉 1997 「岩手県内の経塚の検証 2-経塚の遺構と墳墓の遺構-」『岩手考古学会』9号 岩手考古学会上市町 1970 『上市町誌』
- 上市町教育委員会 1995 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査概報』
- 上市町教育委員会 1997 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第2次調査概報』
- 上市町教育委員会 1998 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第3次調査概報』
- 上市町教育委員会 1999 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第4次調査概報』
- 上市町教育委員会 2000 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第5次調査概報』
- 上市町教育委員会 2001 『富山県上市町黒川上山古墓群発掘調査第6次調査概報』
- 久保智康 1987 「平安後期出土鏡の研究序説」『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古と歴史』下
久保智康 1999 『中世・近世の鏡』日本の美術No.394 至文堂
- 藏田 藏編 1967 『仏具』日本の美術No.16 至文堂
- 神戸市教育委員会・神戸市健康教育公社 1984 『地下に眠る神戸の歴史展Ⅱ』
- サ 板田宗彦 1989 『密教法具』日本の美術No.282 至文堂
- 閑 秀大 1985 『経塚』考古学ライブラリー-33 ニュー・サイエンス社
- 閑 秀大 1990 『経塚とその遺物』日本の美術No.292 至文堂
- タ 東京国立博物館編 1985 『那智経塚遺宝』東京美術
富山県 1984 『富山県史 通史編Ⅱ 中世』
- ナ 奈良国立博物館編 1977 『経塚遺宝』東京美術
日光二荒山神社・宮田川清香編 1963 『日光男体山 山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
- 布尾和史 1999 『長滝墓山C遺跡(長滝墓山C経塚)』『能美丘陵遺跡群Ⅳ いしかわサイエンスパーク整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』財团法人石川県埋蔵文化財センター
- ハ 兵庫県埋蔵文化財調査事務所 1985 『莊園・館・経塚』兵庫県埋蔵文化財調査事務所展示会図録2
廣瀬都美 1943 『日本銅鏡の研究』清田舎
- 福井県立博物館 1986 『古鏡の美ー出土鏡を中心にー』
法藏館 1931 『密教大辞典』
- 北陸中世土器研究会 1992 『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』 第5回北陸中世土器研究会資料
北陸中世土器研究会 1994 『中世北陸の寺院と墓地』 第7回北陸中世土器研究会資料
- マ 見附市教育委員会 1977 『小栗山不動院裏山経塚群 新潟県見附市小栗山不動院経塚発掘調査報告書』
村木二郎 2000 『末法思想と経塚の時代』『歴博』No.100 国立歴史民俗博物館
- ヤ 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館



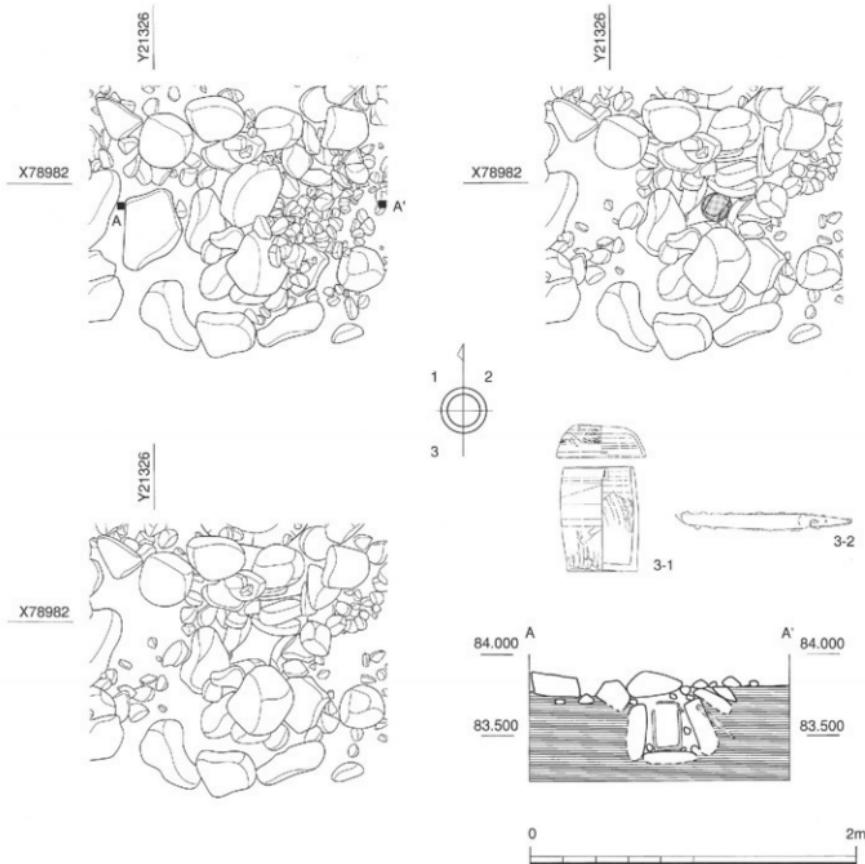
第3図 遺構全体図(1 / 200)



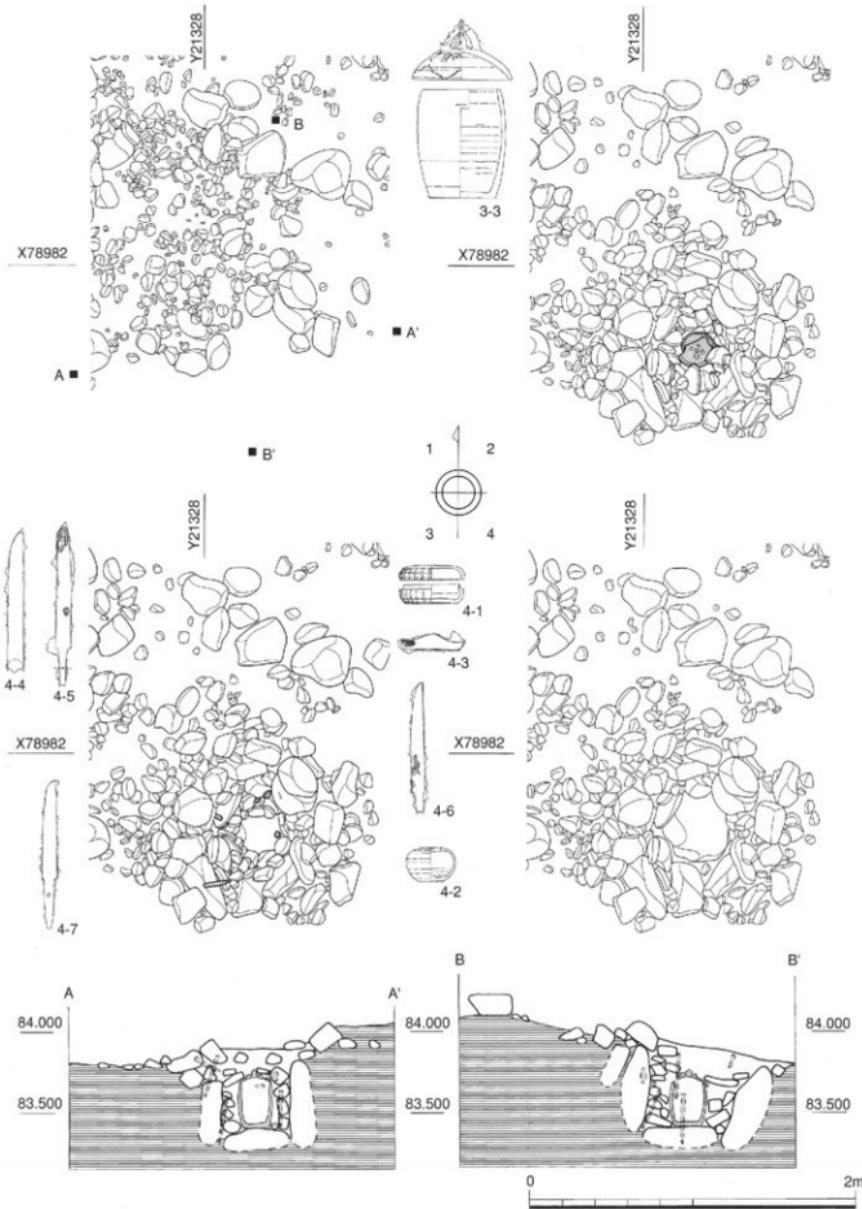
第4図 1-1号石榴・壇状集石実測図(1/30)



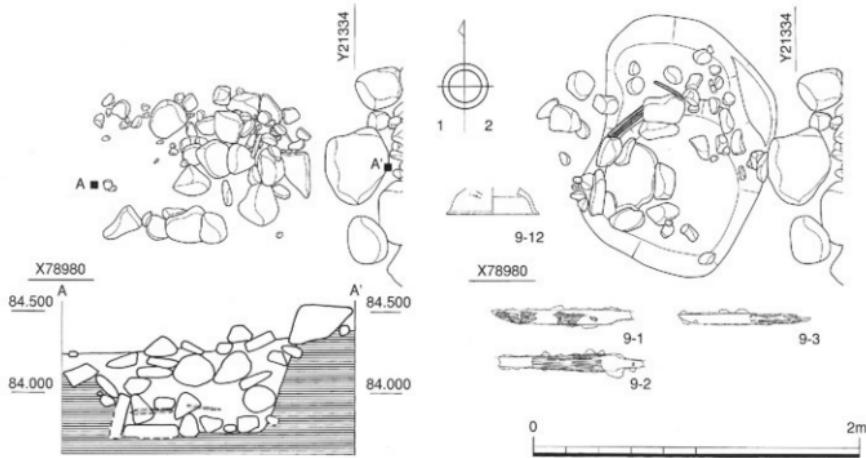
第5図 1-2号経塚実測図(1/30)



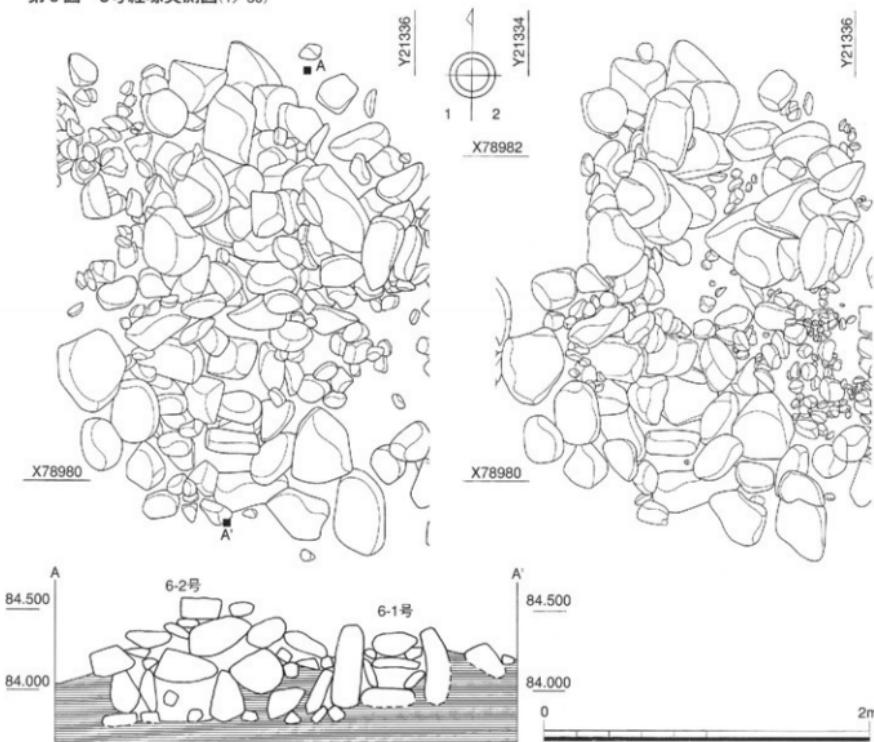
第6図 2-2号経塚実測図(1/30)



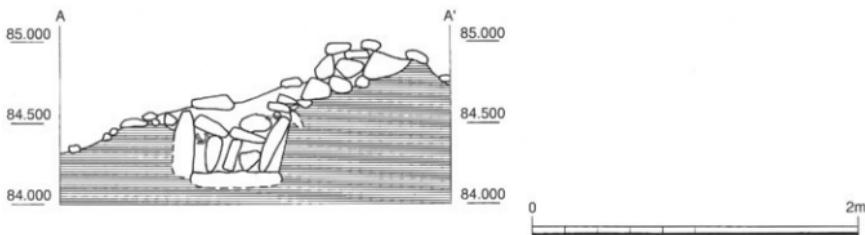
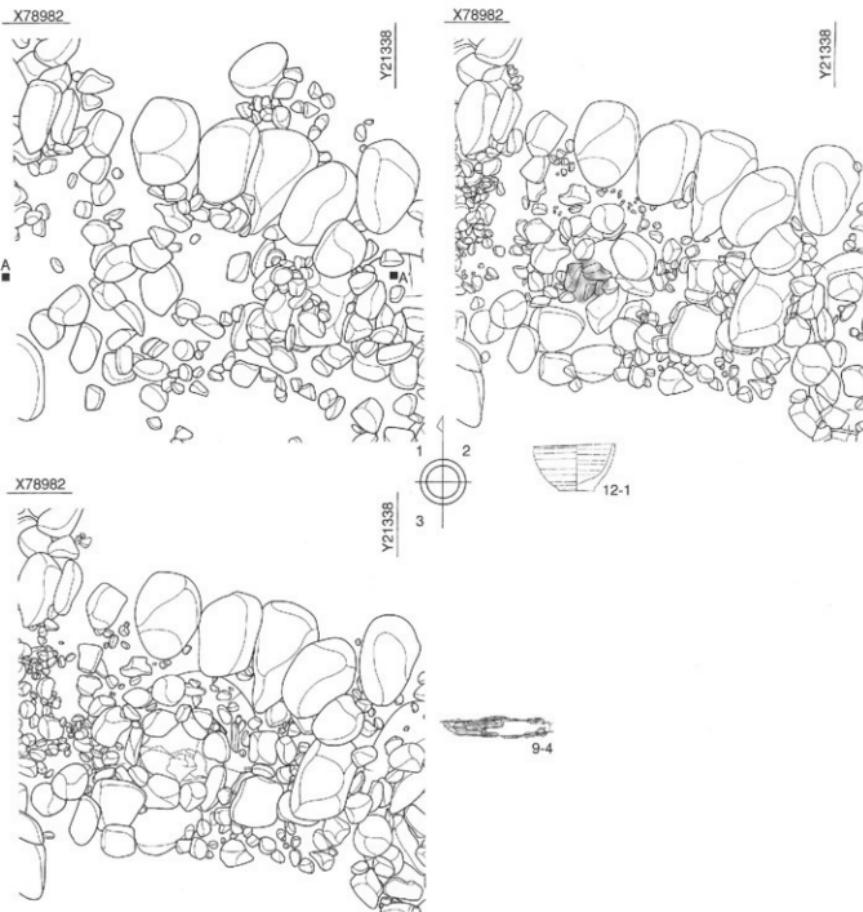
第7図 3号経塚実測図(1/30)



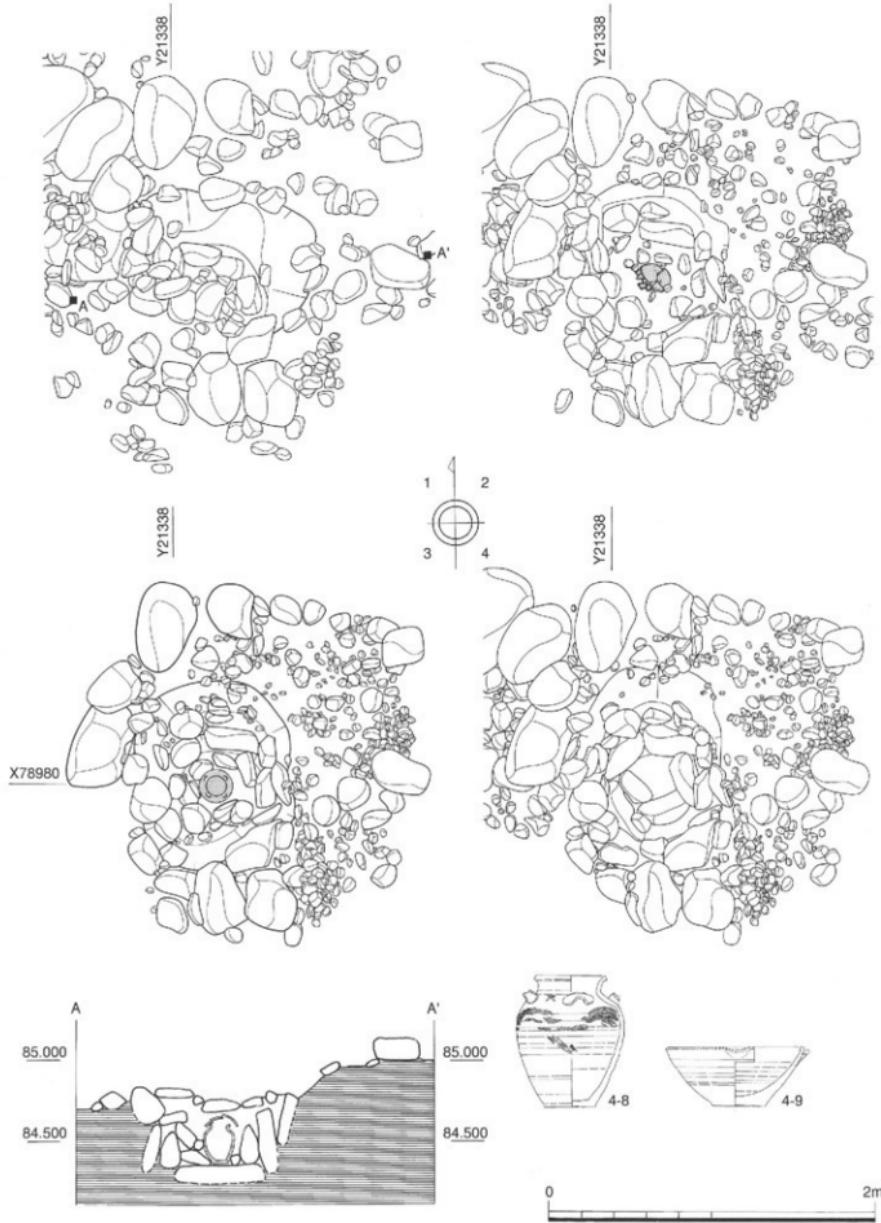
第8図 5号経塚実測図(1/30)



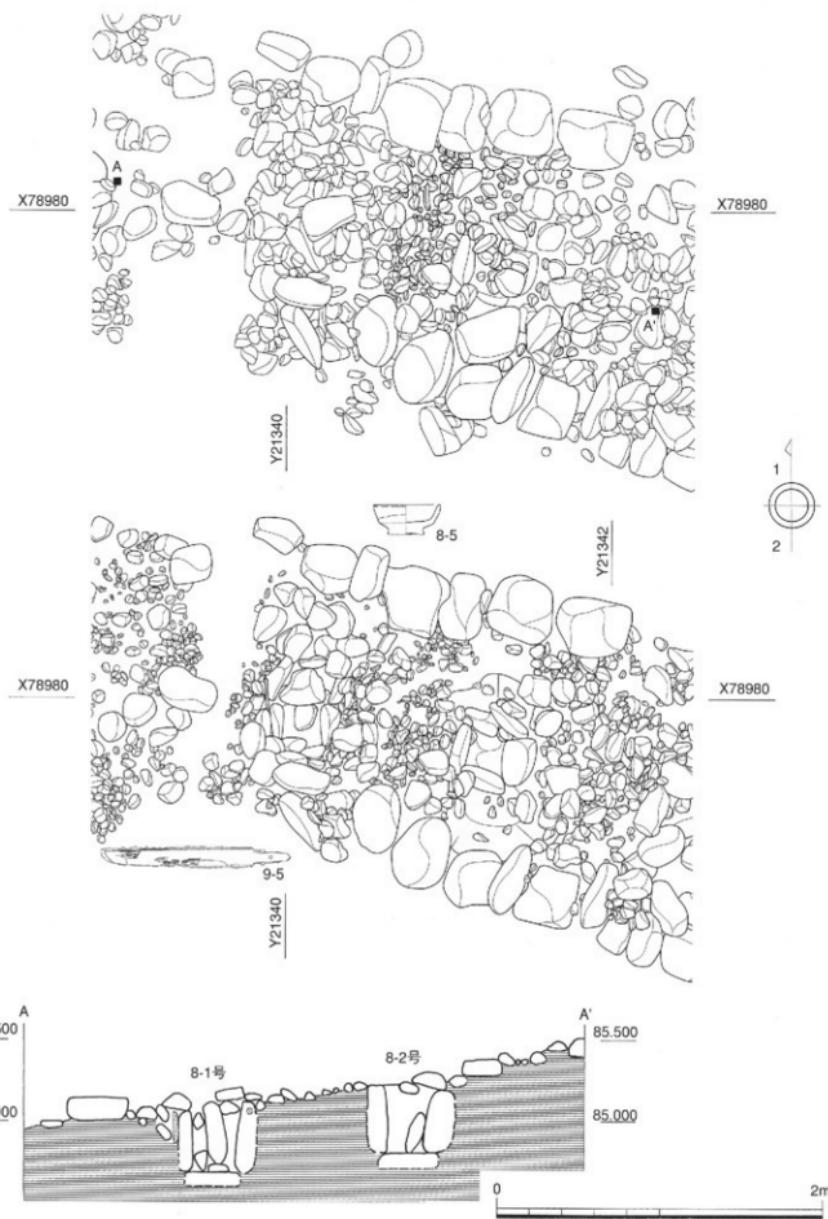
第9図 6号経塚実測図(1/30)



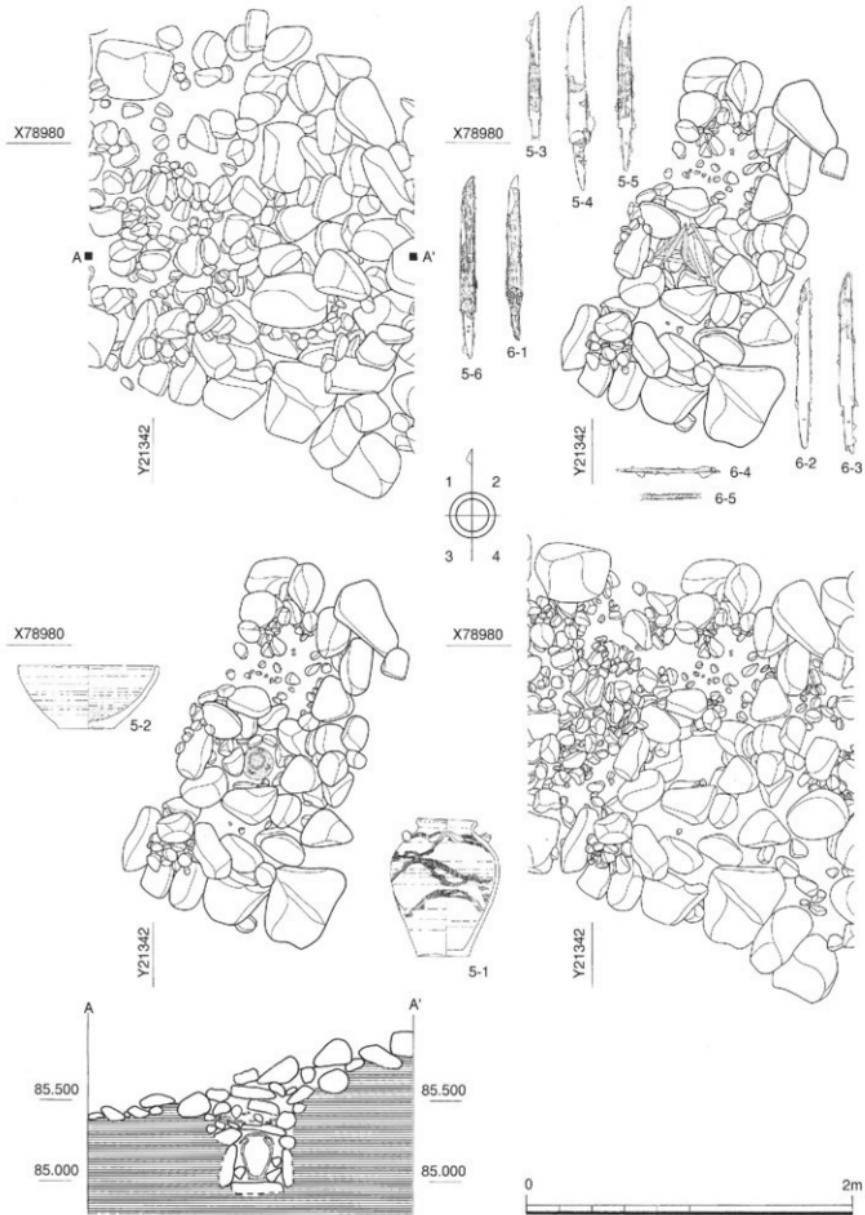
第10図 7-1号経塚実測図(1/30)



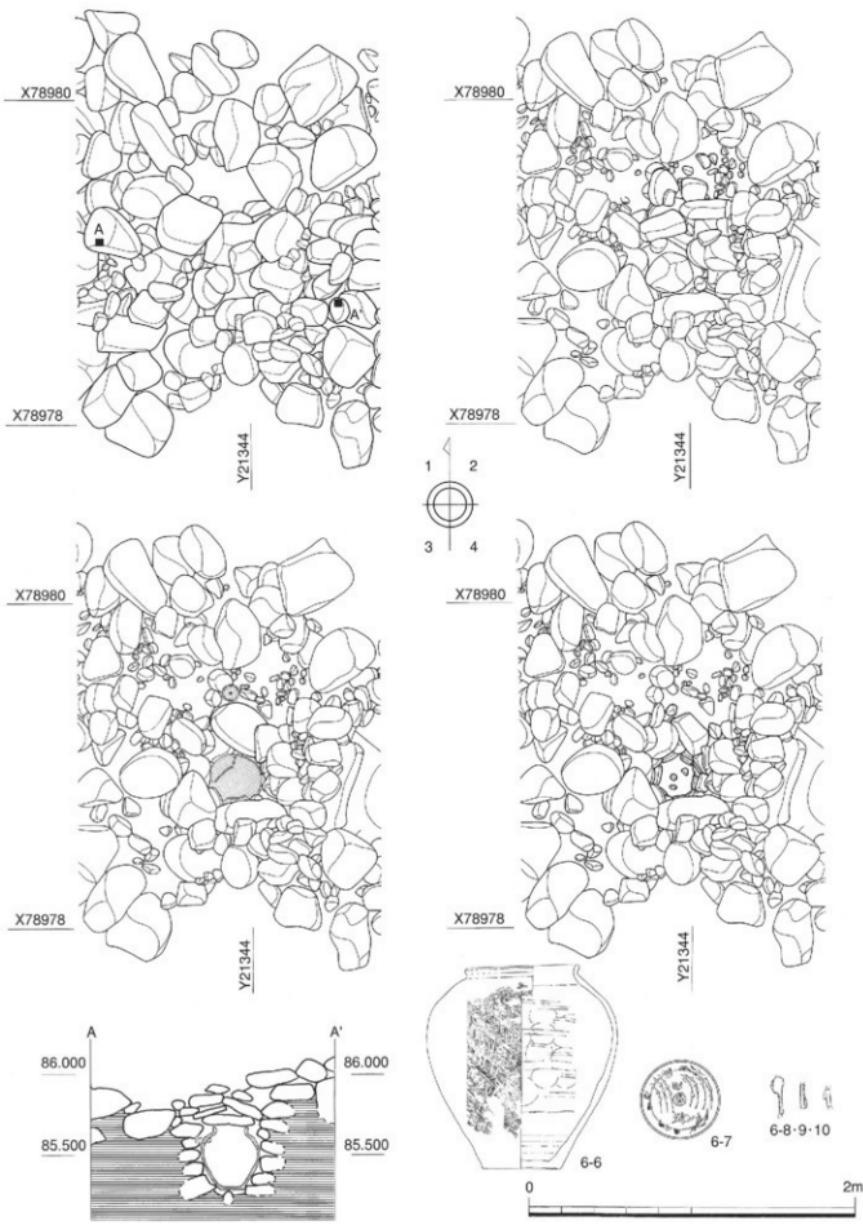
第11図 7-2号経塚実測図(1/30)



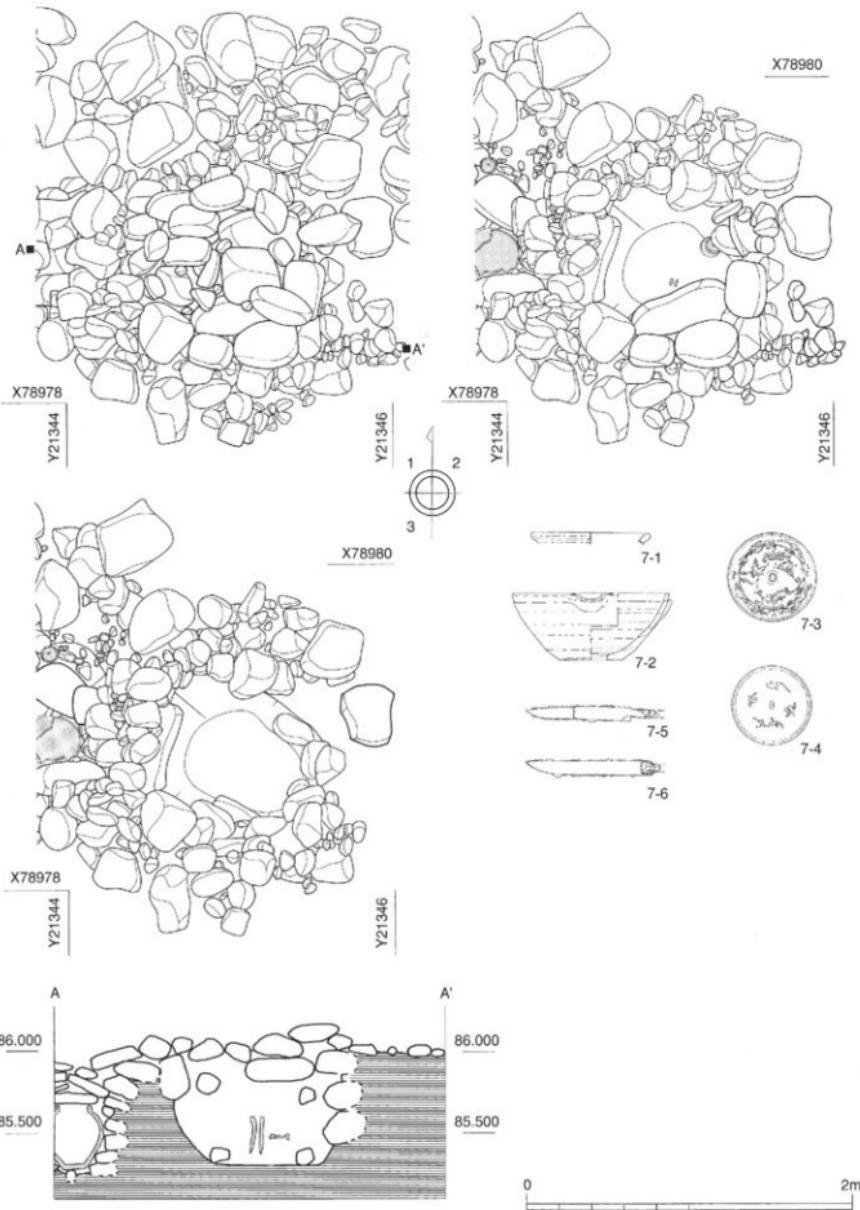
第12図 8号経塚実測図(1/30)



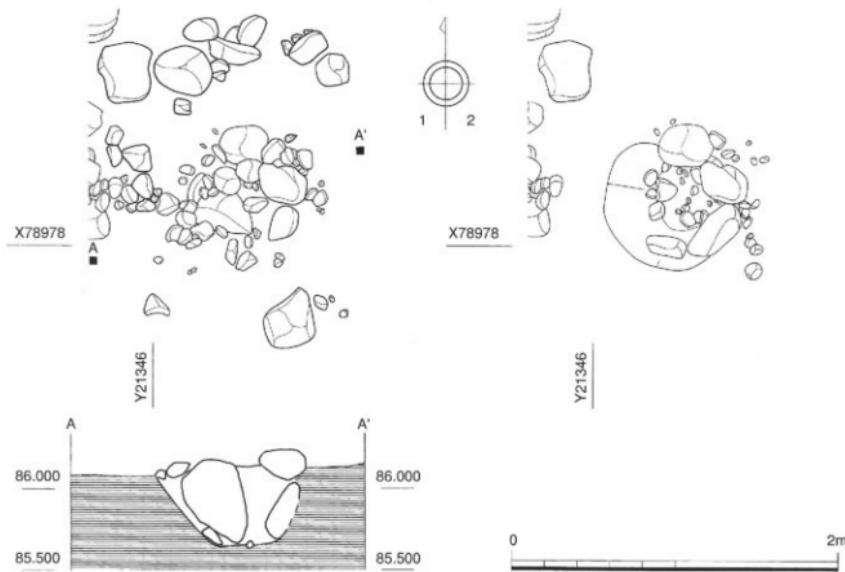
第13図 9号経塚実測図(1/30)



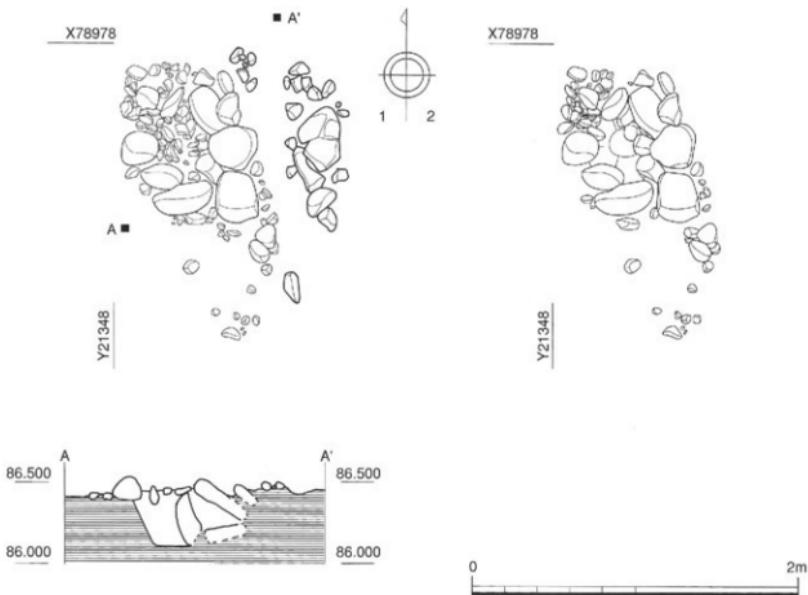
第14図 10号経塚実測図(1/30)



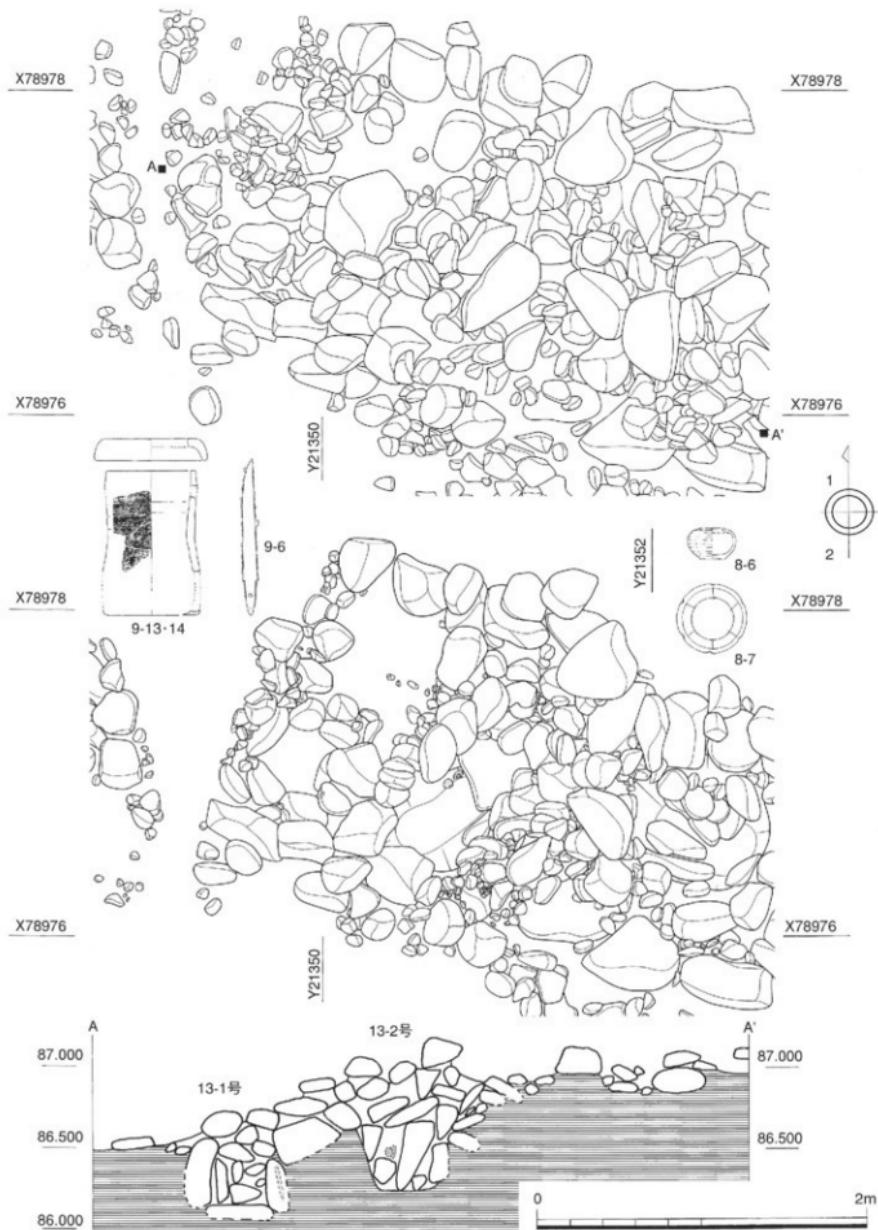
第15図 11号経塚実測図(1/30)



第16図 12号経塚実測図(1/30)

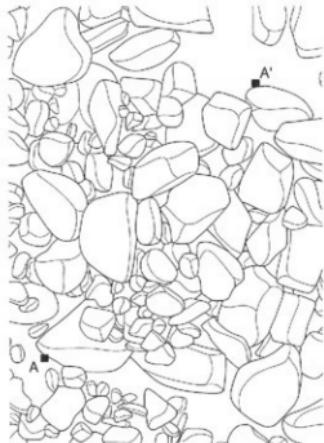


第17図 13-1号経塚実測図(1/30)



第18図 13-1号・13-2号経塚実測図(1/30)

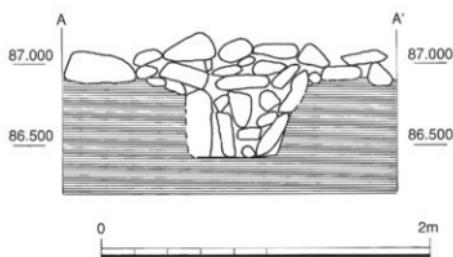
X78976



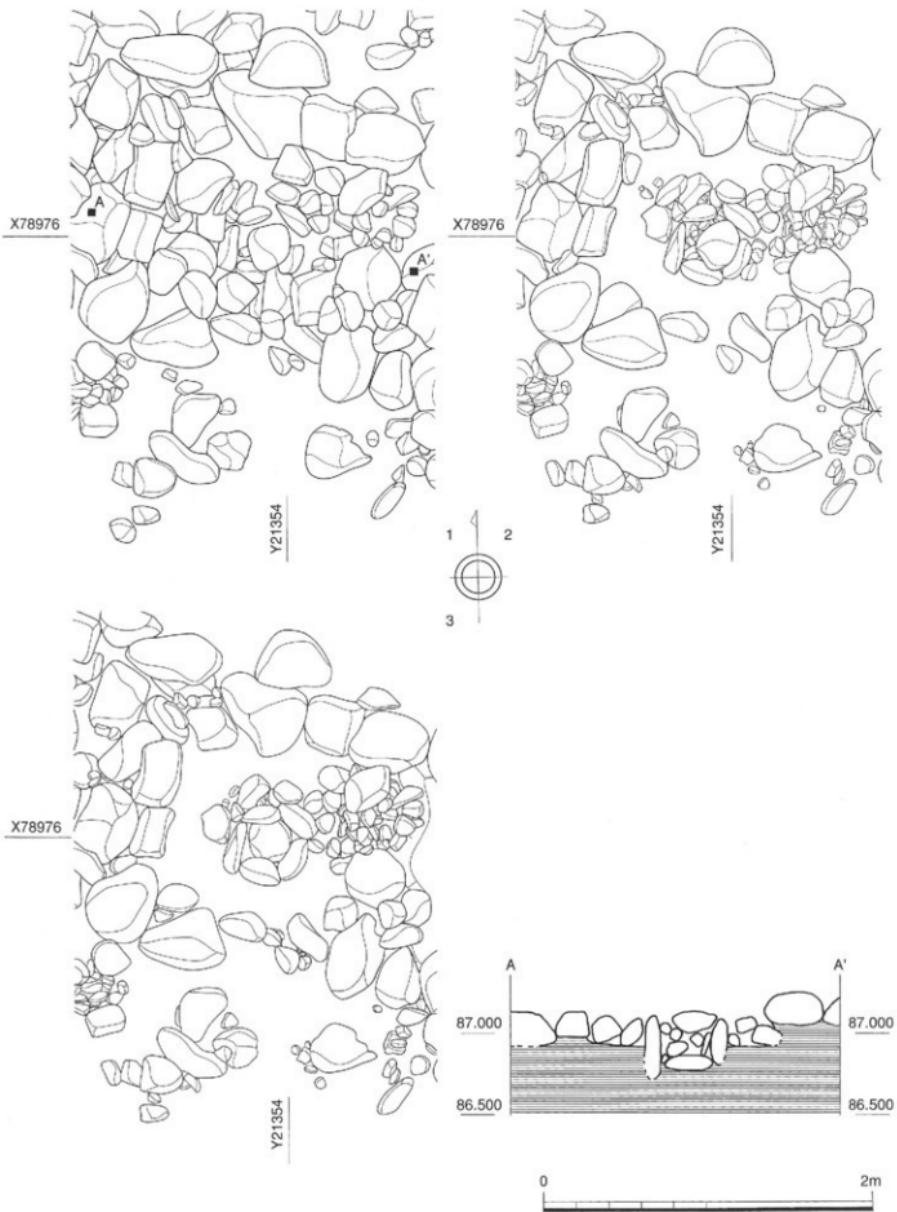
X78976



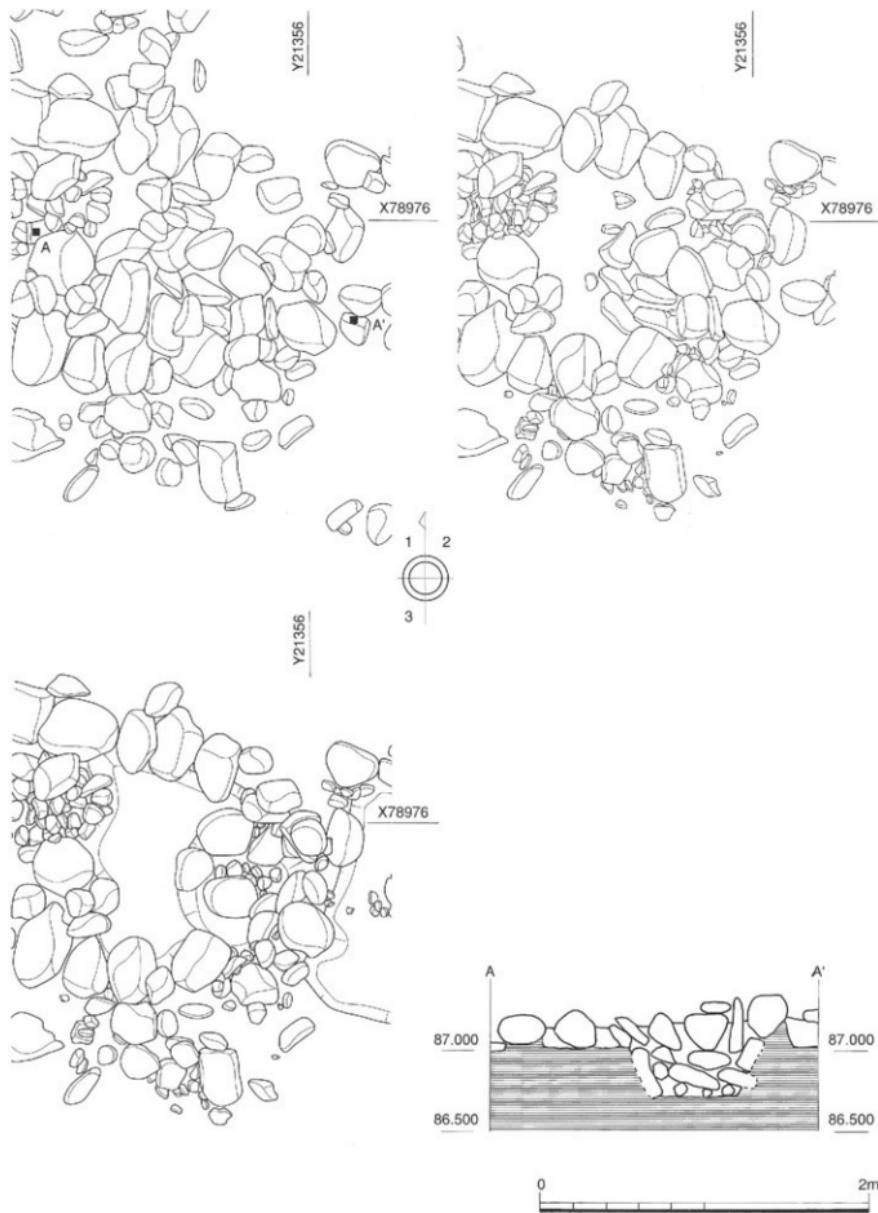
X78976



第19図 14号経塚実測図(1/30)

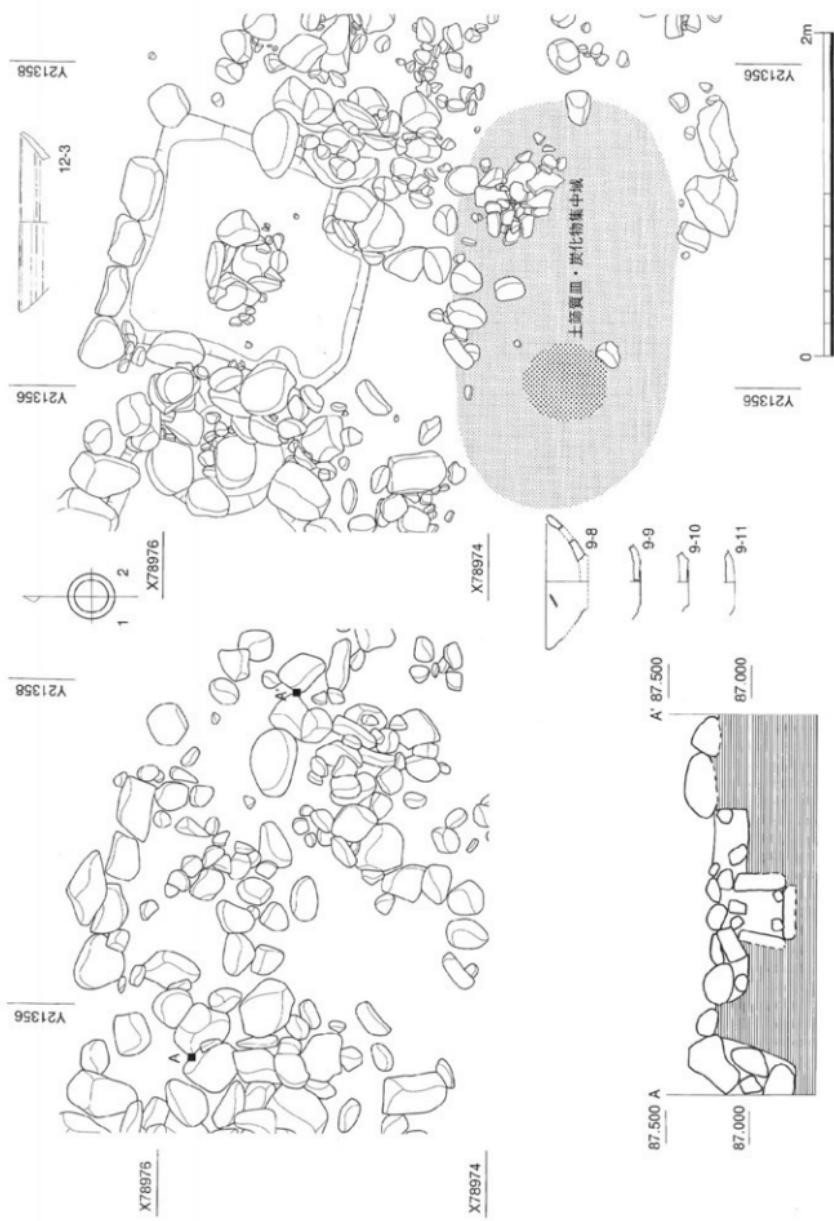


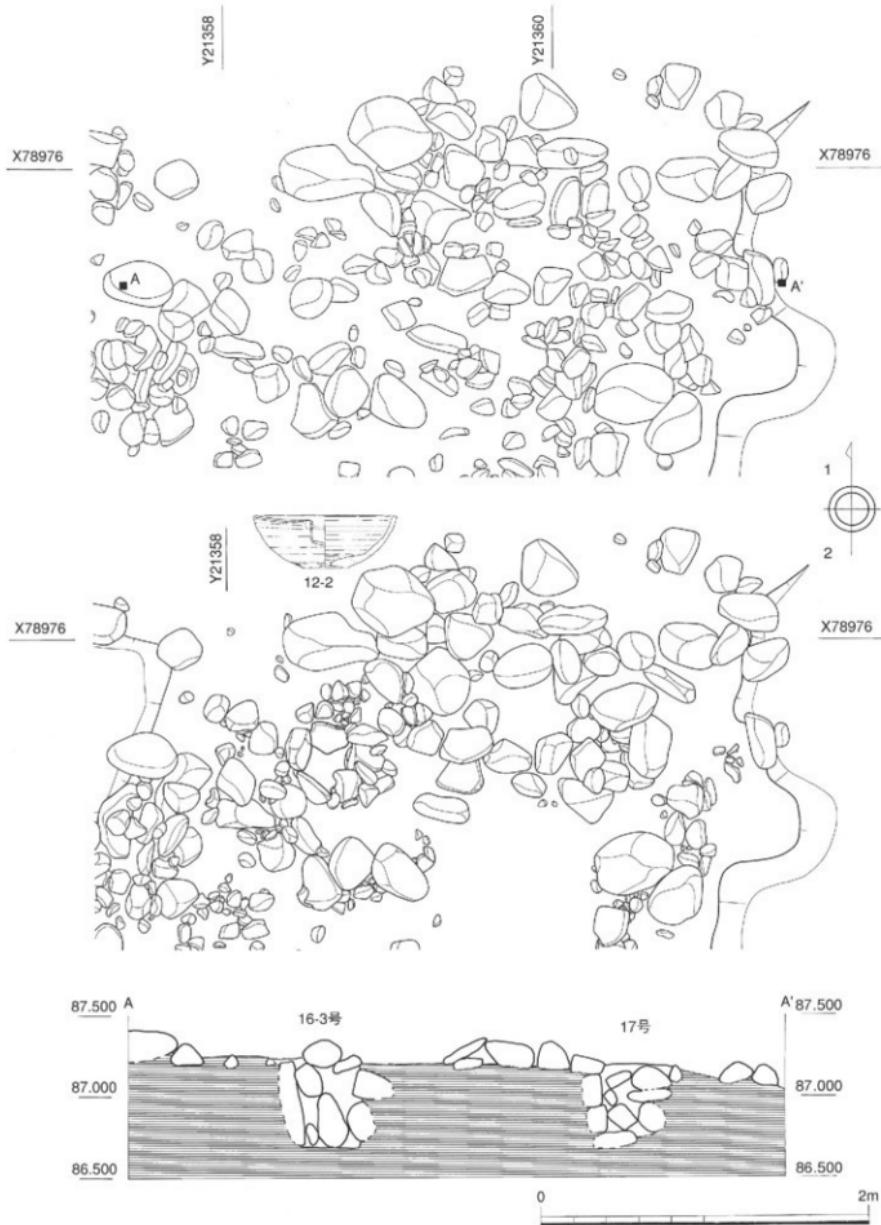
第20図 15号経塚実測図(1/30)



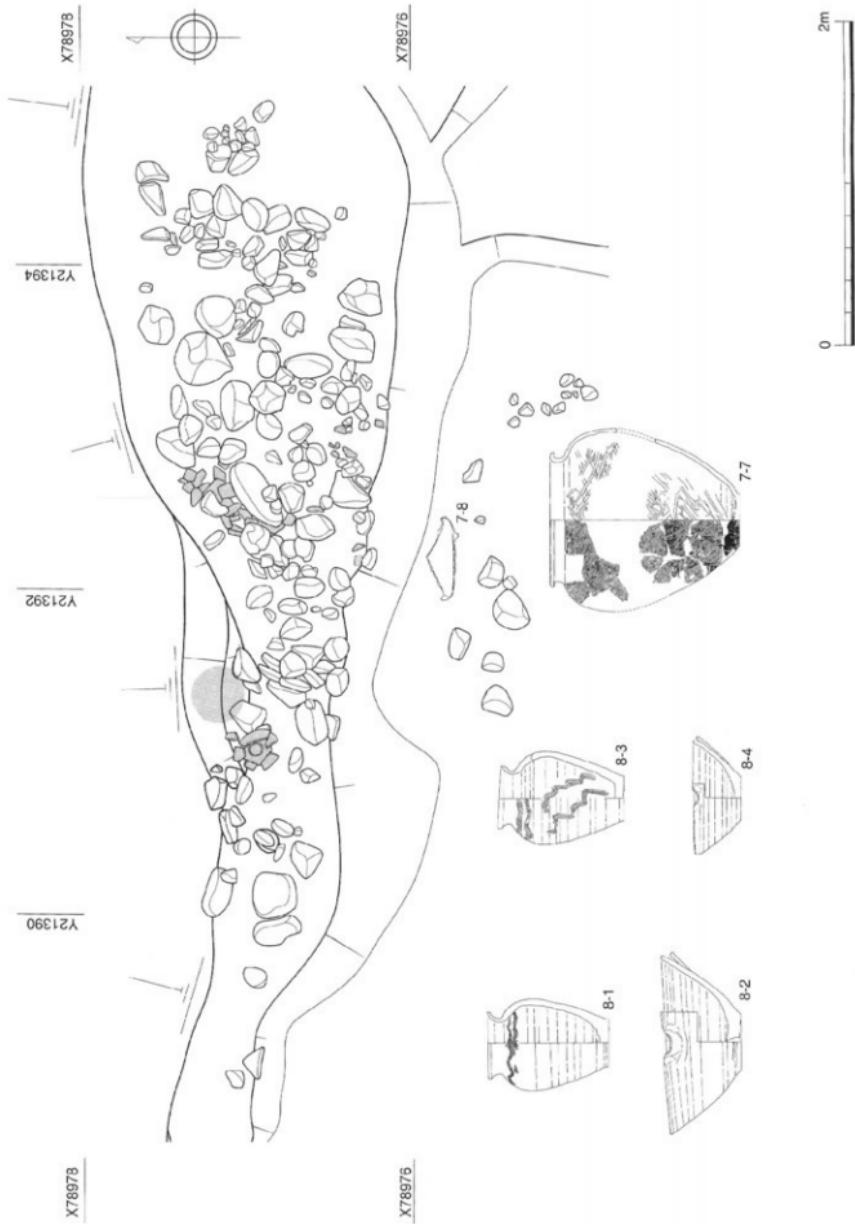
第21図 16-1号経塚実測図(1/30)

第22図 16-2号溝深、土師質Ⅳ・炭化物集中域測定図(1/30)



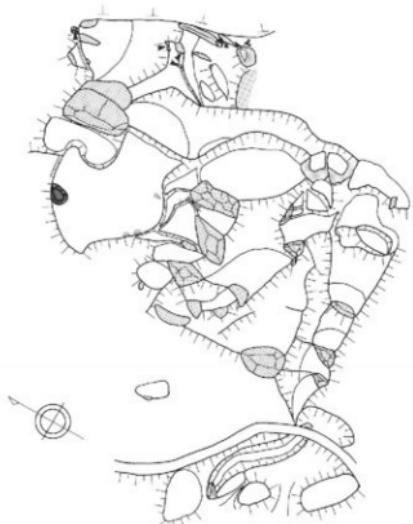


第23図 16-3号・17号経塚実測図(1/30)

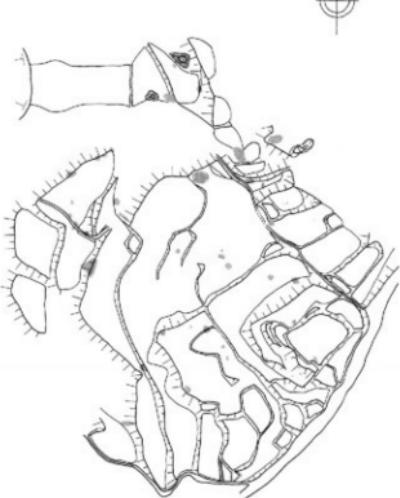


第24图 29号探实测图(1/30)

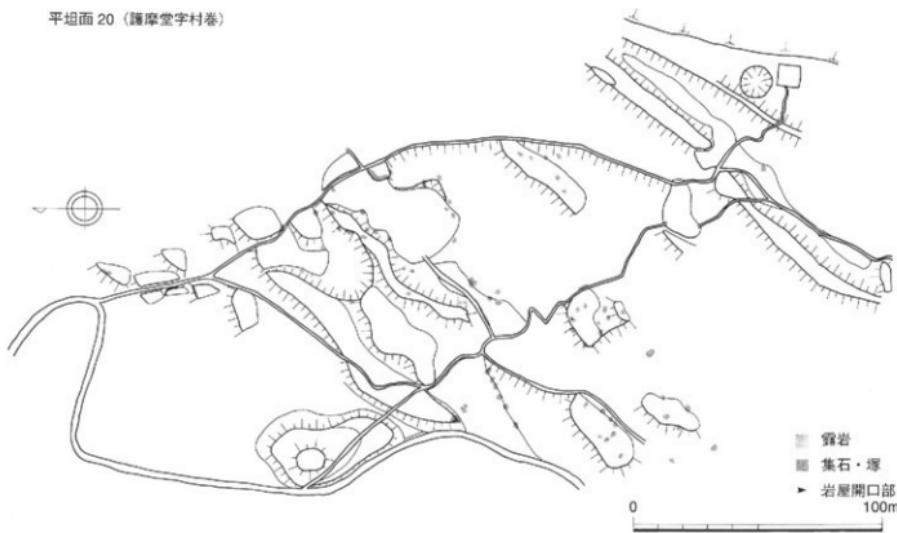
平坦面 18 (黒川字岸天)



平坦面 19 (護摩堂字曲戸)



平坦面 20 (護摩堂字村巻)



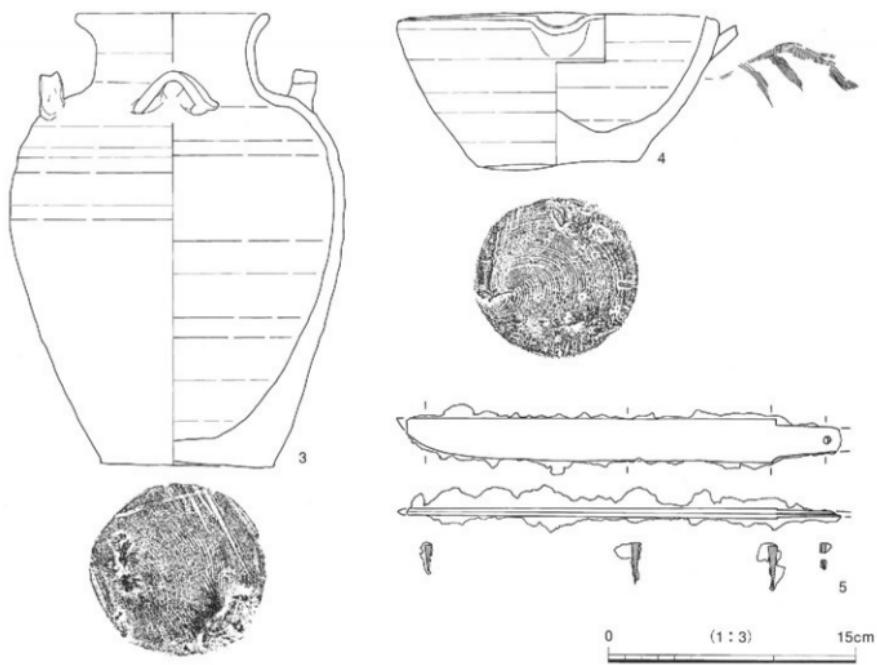
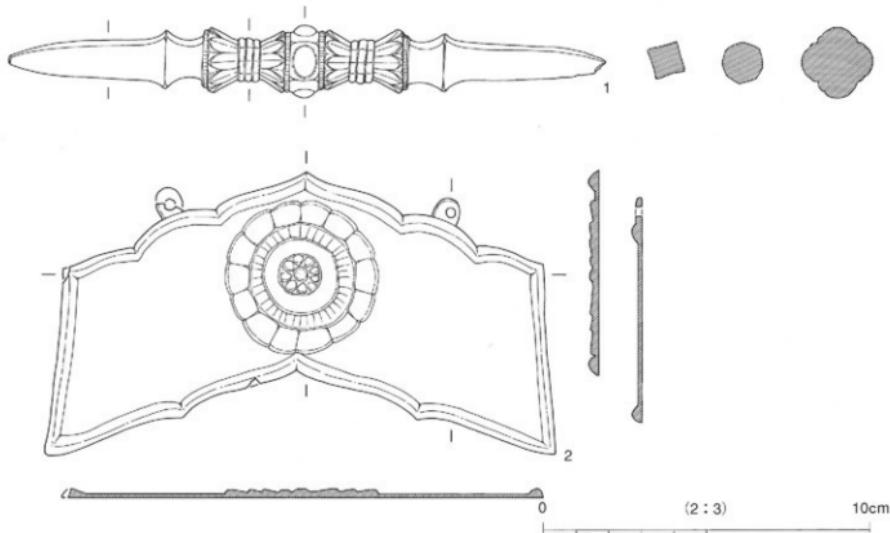
第25図 黒川・護摩堂地区周辺遺跡(1/2,000) 平坦面 18・19・20



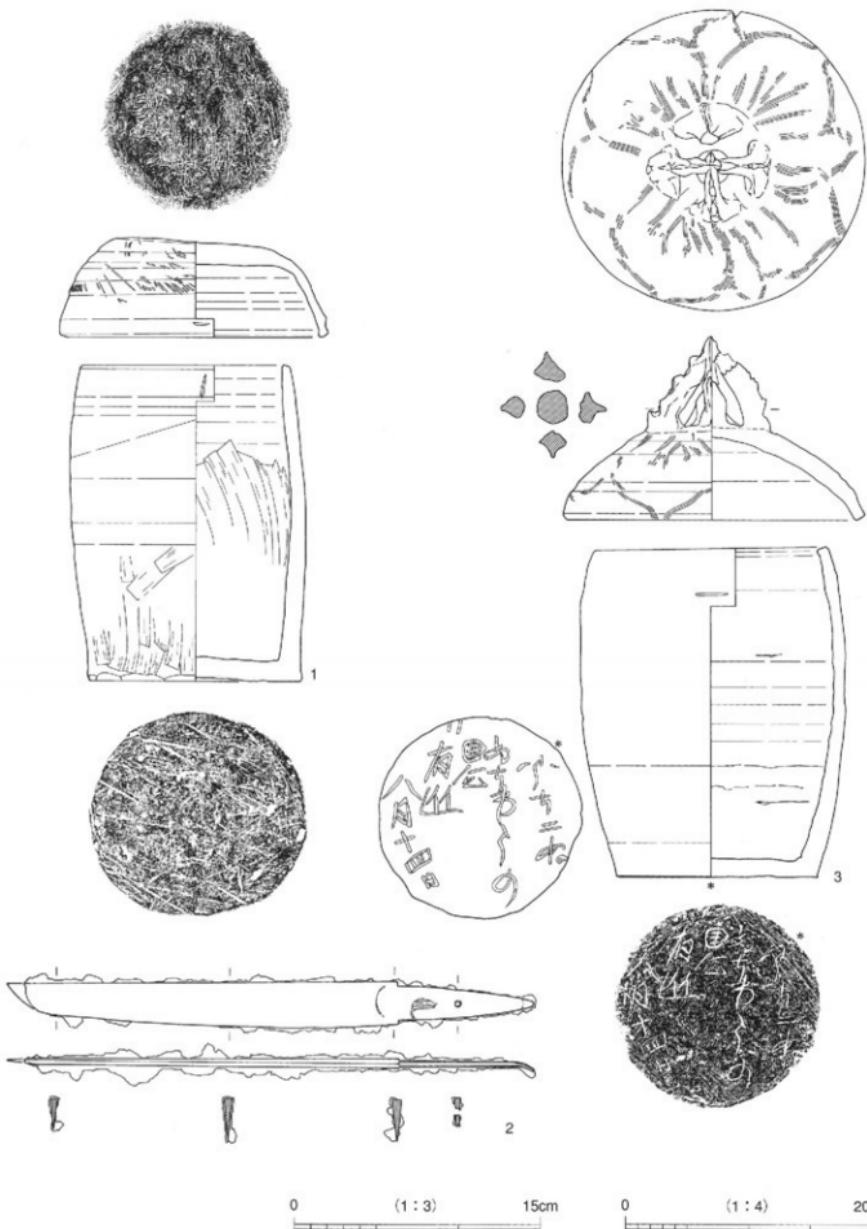
第26図 黒川・護摩堂地区周辺遺跡(畫場関係)分布図(1/10,000)



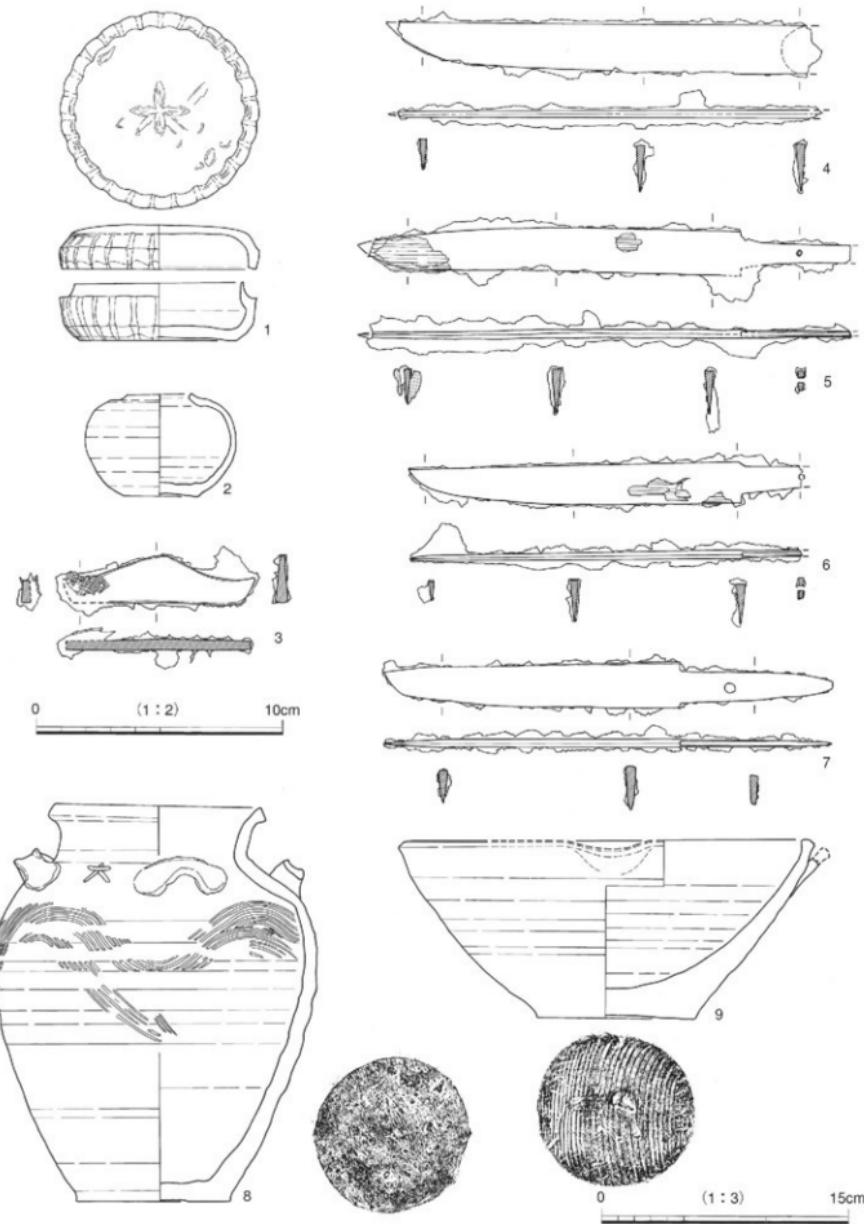
図版1 黒川上山古墳群周辺航空写真(約1/6000)



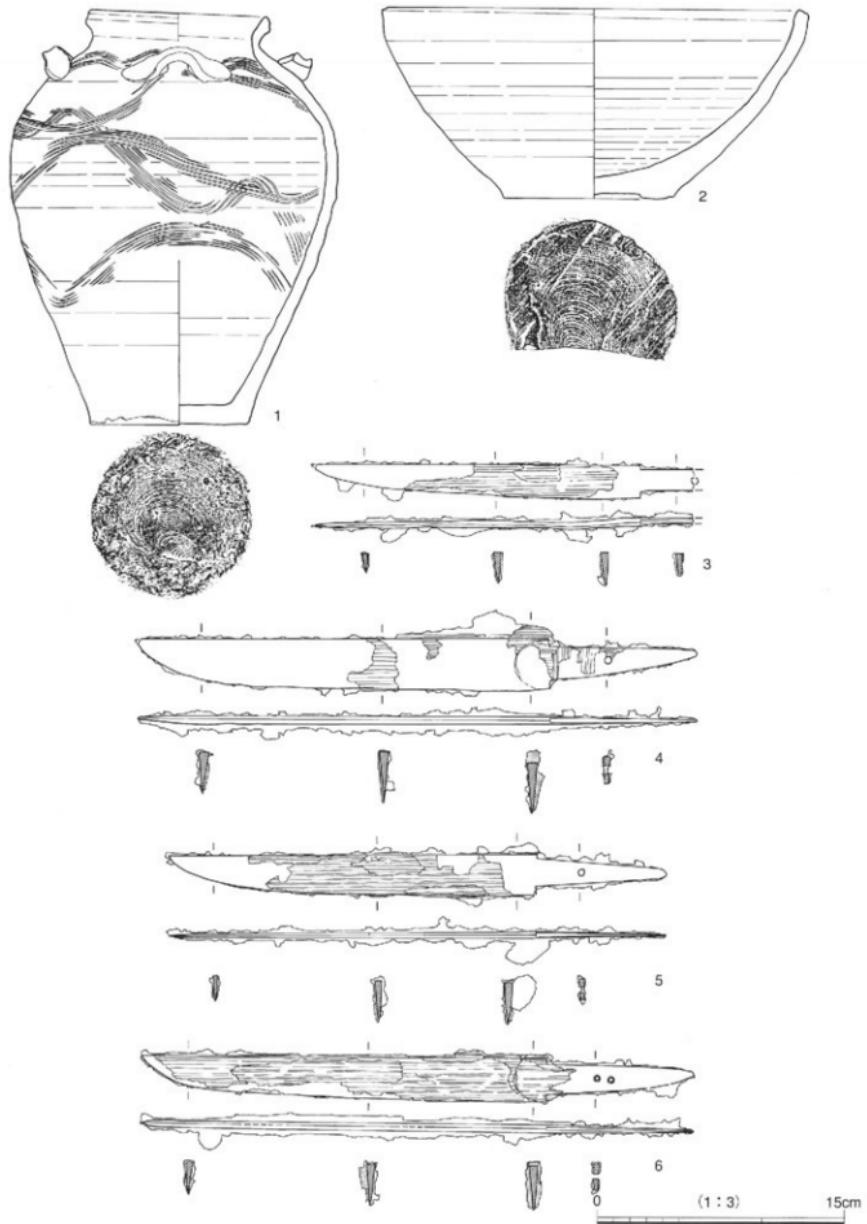
图版2 遗物实测图(缩尺 1·2:2/3, 3~5:1/3)
1-1号石棒(1·2), 1-2号经琢(3~5)



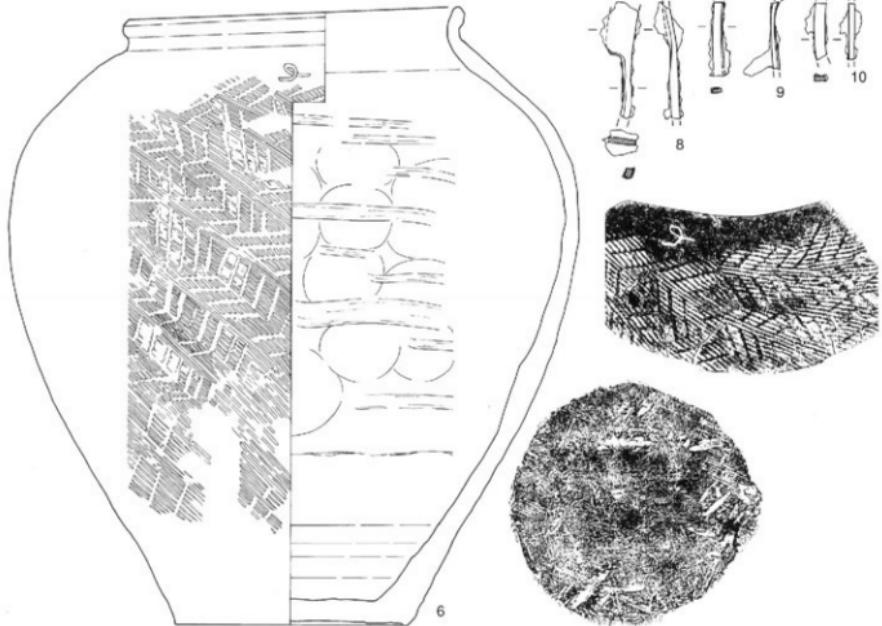
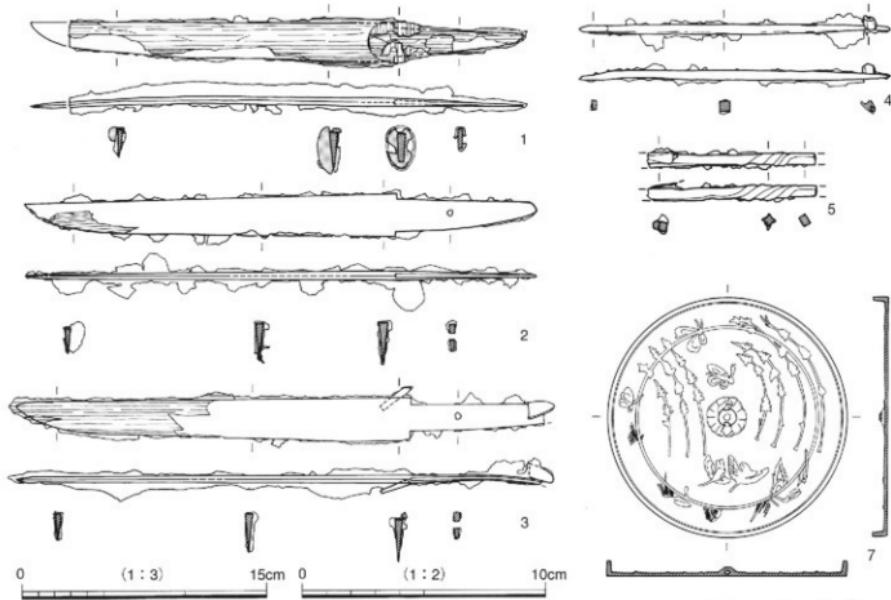
図版 3 遺物実測図(縮尺 1・3:1/4, 2:1/3)
2-2号経塚(1・2), 3号経塚(3)



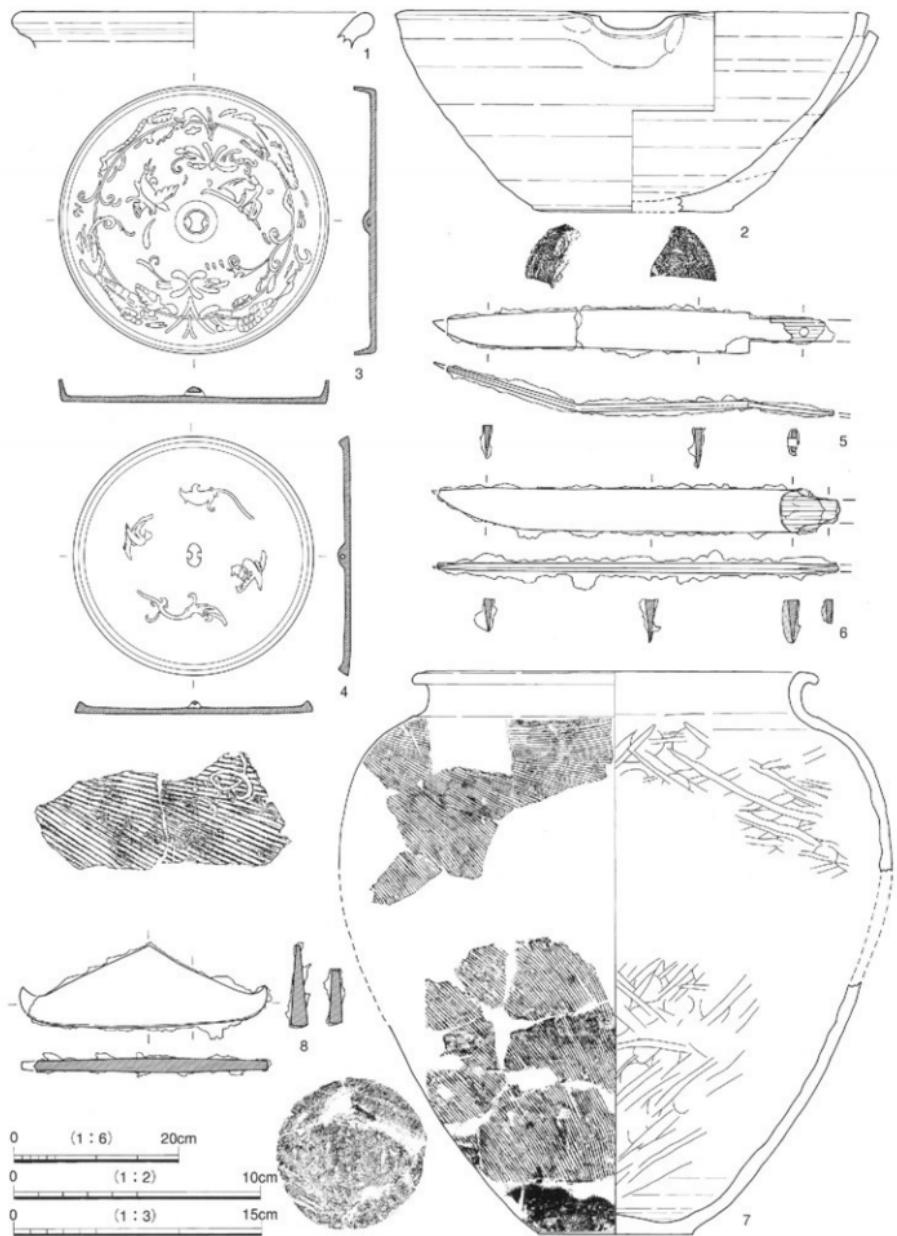
图版4 遗物实测图(缩尺 1~3:1/2, 4~9:1/3)
3号罐底(1~7),7~2号罐底(8·9)



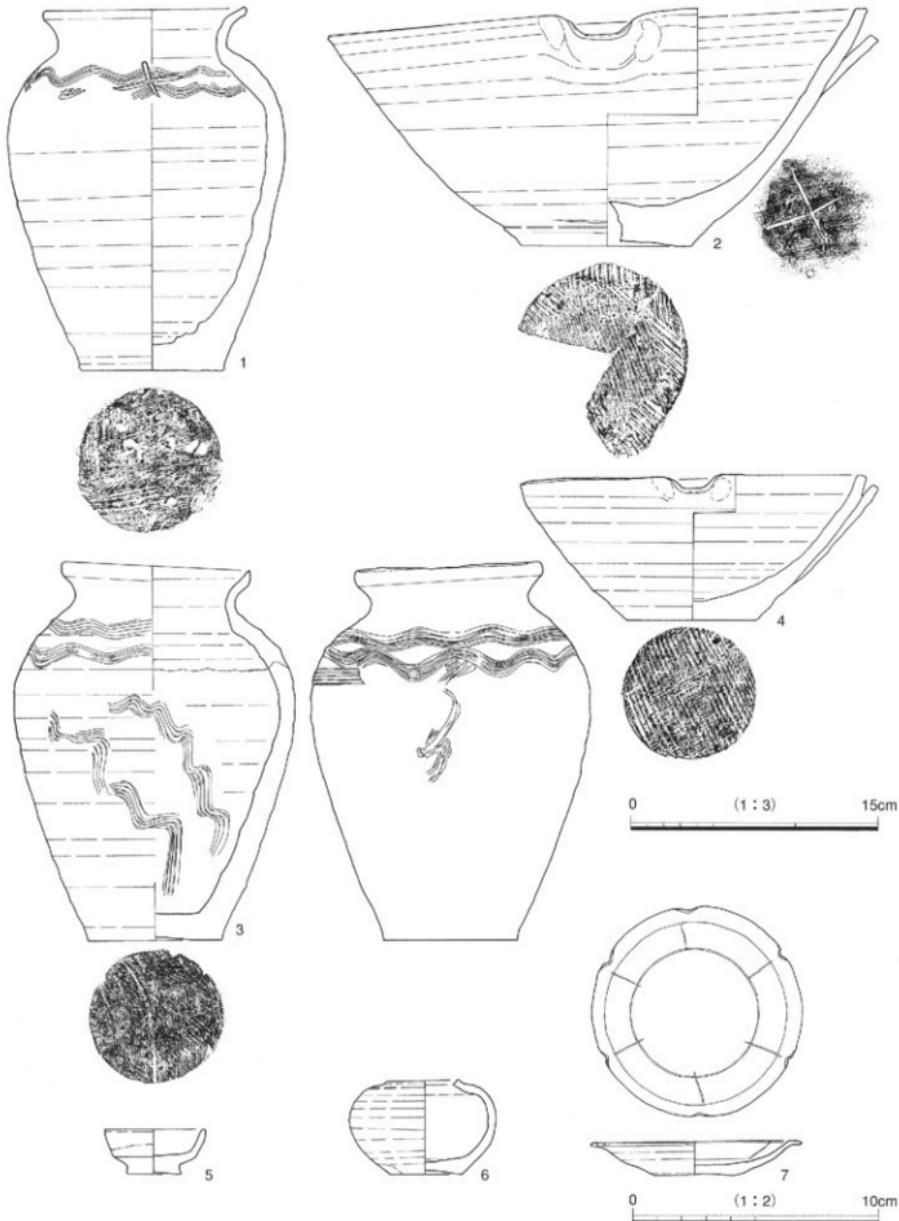
図版 5 遺物実測図(縮尺 1/3)
9号経塚



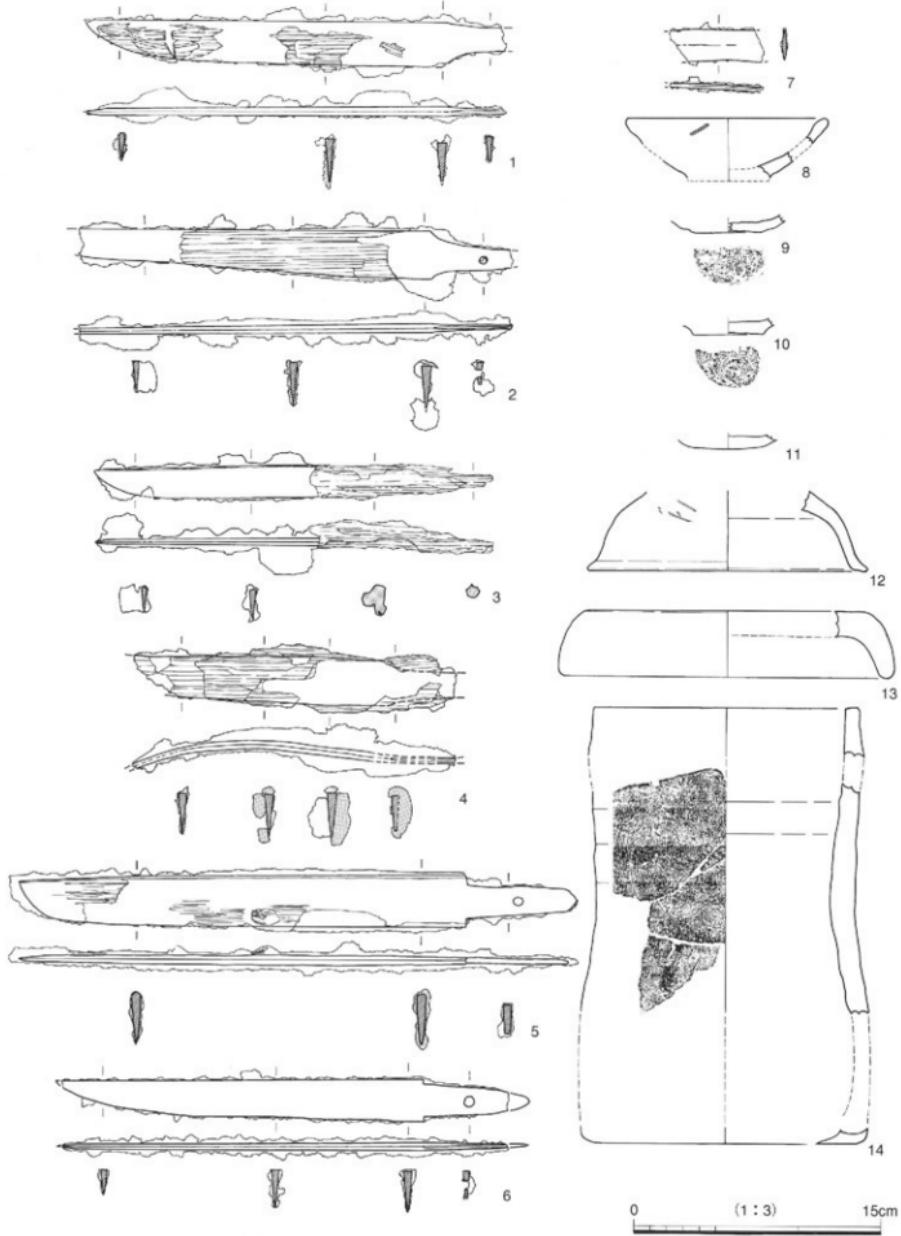
図版 6 遺物実測図(縮尺 1~3・6:1/3, 4・5・7~10:1/2)
9号経塚(1~5), 10号経塚(6~10)



図版7 遺物実測図(縮尺 1・2・5・6:1/3, 3・4・8:1/2, 7:1/6)
11号経塚(1~6)、29号塚(7~8)

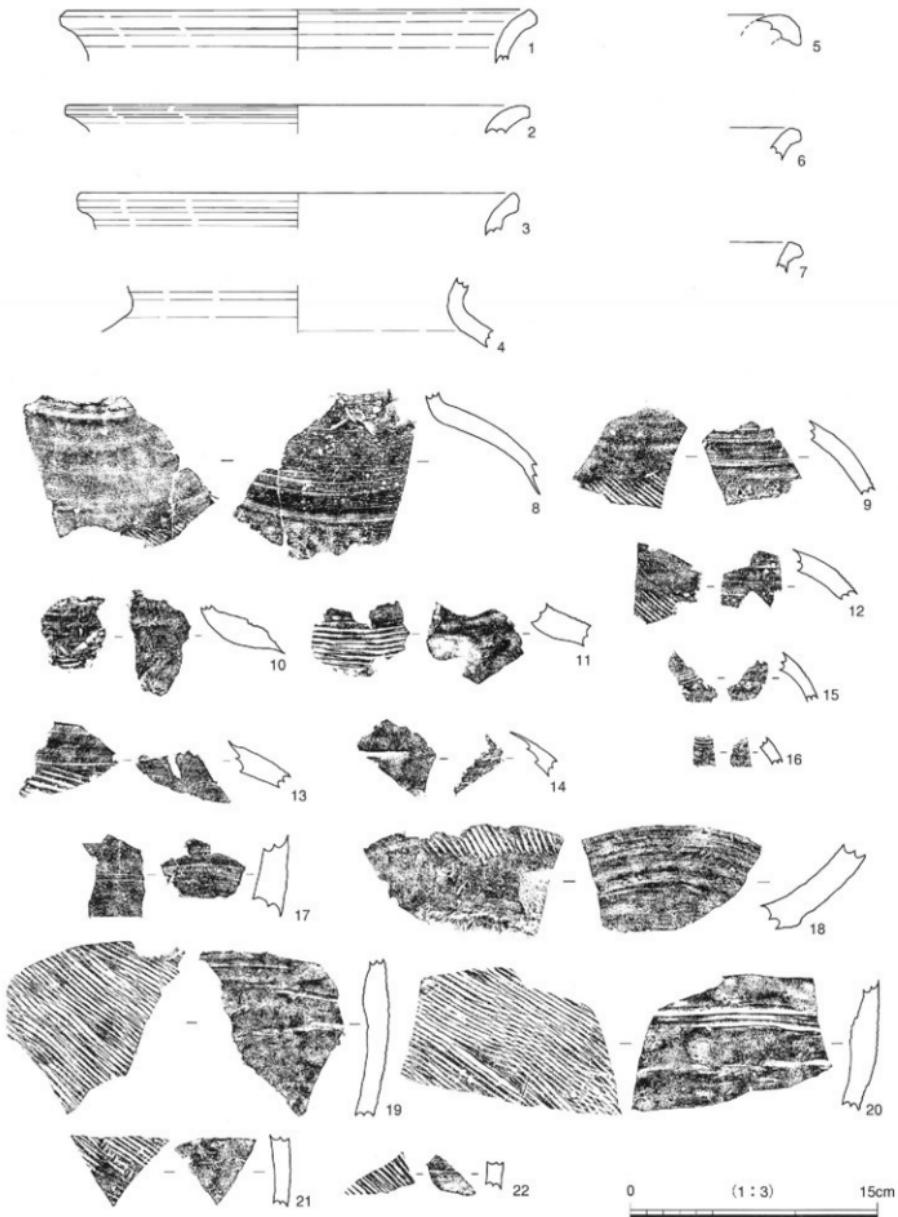


図版 8 遺物実測図(縮尺 1~4:1/3, 5~7:1/2)
29号塚(1~4, 3・4は平成11年度分布調査採集遺物), 8-1号経塚(5), 13-2号経塚(6・7)



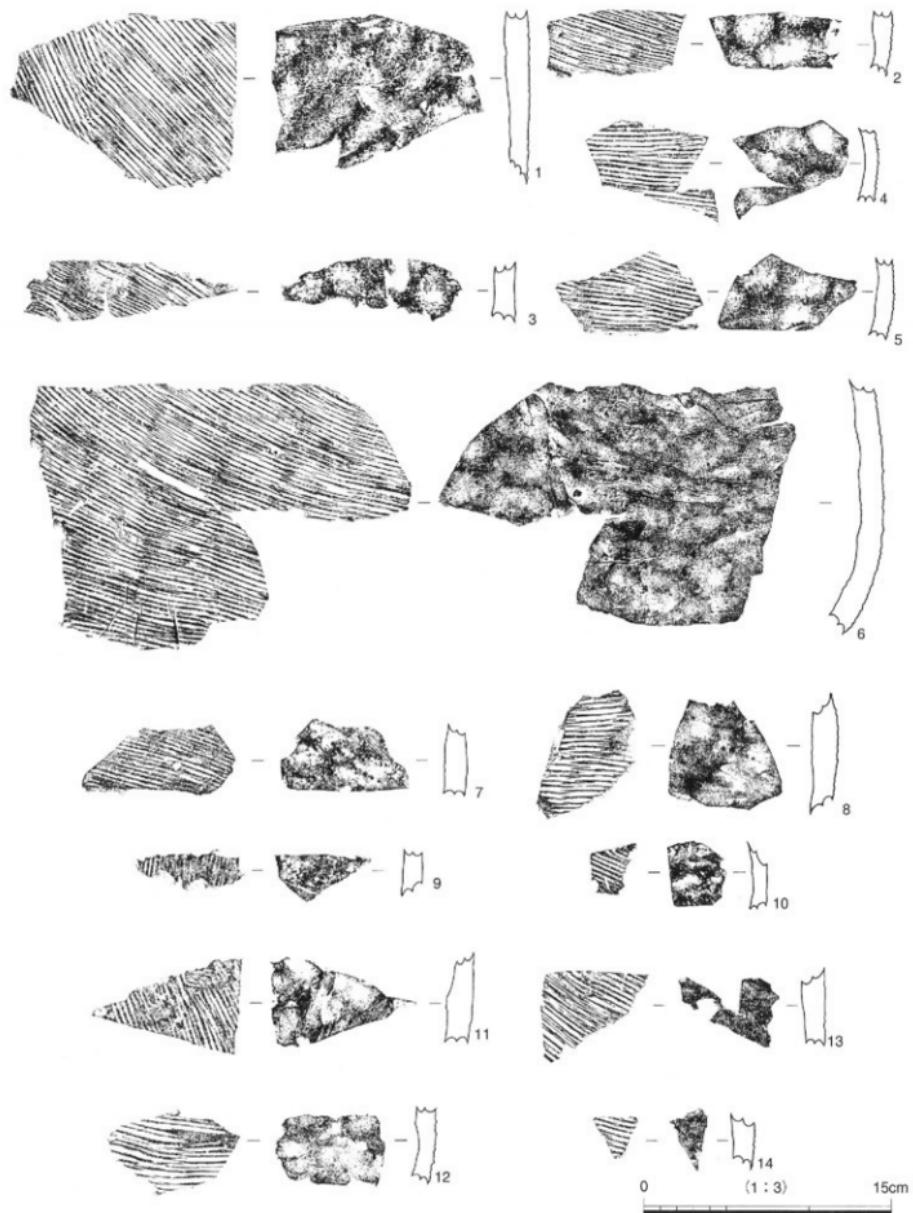
図版 9 遺物実測図(縮尺 1/3)

5号経塚(1~3・12),7-1号経塚(4),8-1号経塚(5),13-1号経塚(6・13・14),集石30(7),平坦面1(8~11)



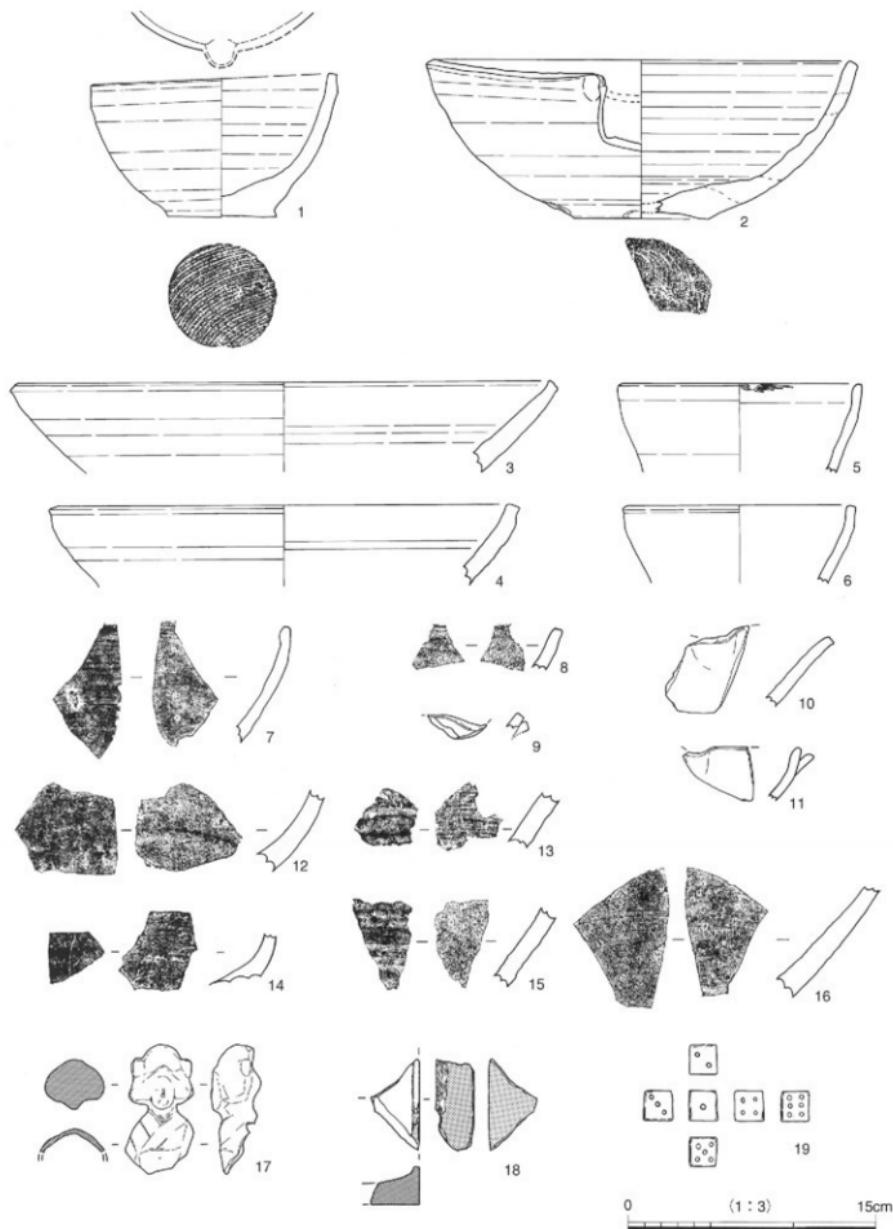
图版10 遗物实测图(缩尺 1/3)

13-2号经砾(22),集石19(19~21),集石20(2),集石22(6),集石24(1),集石25(3~5·8·9·12·18),集石26(10)
平坦面3(7~11·13·17)



図版11 遺物実測図(縮尺 1/3)

集石20(1)、集石21(2)、集石23(3)、集石24(4~6)、集石25(7~10)、集石27(11)、集石28(12)、平坦面3(13・14)



图版12 遗物実測図(縮尺 1/3)

7-1号経塚(1), 16-2号経塚(3), 16-3号経塚(2), 17号経塚(9), 集石21(4・13), 集石24(14), 集石25(5・7・10・15)
集石26(6・11), 集石25・26(15), 25号塚(16), 集石30(17), 平坦面3(8・10), 2-2号経塚南側崖下採集(12)



図版13 遺構写真

1. 通路全景(西上空より) 2. 集石全景(東より)